公開シンポジウム

平田国学の幕末維新

〔日時〕 平成三十年七月十四日（土）
午後一時三十分～五時

〔会場〕 明治神宮参集殿

〔主催〕 明治聖徳記念学会

〔共催〕 國學院大學研究開発推進センター

基調講演

平田国学の幕末維新

宮地正人

一　問題の所在

ただいまご紹介いただいた宮地です。私は幕末維新の政治過程を研究してきた者です。神道学や宗教史の専門家では全くありません。はじめにお断りしておきます。この時期の政治過程を研究する際の一つの観測点にしなければならないのが、サムライ階級ではなく在地の豪農・豪商が主体的に維新変革に参画していった木曽谷を挟んだ東美濃、そして南信州の「東濃・南信」地帯です。皆さんご存じの島崎藤村、自分の父親島崎正樹をモデルにし、平田国学者青山半蔵を主人公とする『夜明け前』の世界、ここを私の実証研究のフィールドの一つにしてきました。したがって、平田国学が明治維新とどのように関わっているかが私の関心になってきました。ただし、言うまでもなくフィールド研究は容易にできるものではありません。よそ者です。いろいろの方からの理解と協力を得て調査を開始できたのは一九九八年、夏のことでした。二度目のいいことも、研究者冥利につきますが、私にとって、二〇〇一年の秋におこりました。代々木の平田神社に大切に持ち伝えられてきた篤胤、鋭胤、延胤、そして盛胤、四代にわたる気吹舎史料が、若い仲間と共に研究できるようになりました。この調査の中間報告は、私が当時勤めていた千葉県佐倉の国立歴史民俗博物館の企画展示「明治維新と平田国学」でご紹介することができ、現在この史料は歴博で皆さんが閲覧できるようになっています。私がこの平田家史料を調査するなかで、最も強烈な印象というより、衝撃を受けたものが、

平田篤胤の対露危機の受け止め方です。『千島の白波』には収められていないロシア語も含む幕府の極秘文書も彼は丹念に収集し続けていました。この対露危機は一七九二年、ラクスマンが根室に来たときに本格化し、一八一三年、ディアナ号のゴロヴニンが松前の牢獄から釈放され、カムチャツカに帰ることによって一応収束します。

王政復古は一八六八年。それよりも七十年も前に引き戻って、お前は一体何を考えているつもりだと批判する方もいらっしゃるかもわかりませんが、平田国学とは何だったか、この篤胤の強烈な西洋認識を知ることによって、その起承転結をようやく自分として理解しえたと思っています。もちろん、神道学や宗教史においては全くの素人の一政治史研究者の立場からの理解にすぎませんが、私の理解する範囲内での平田国学の起承転結のごく概略をこの場でお話ししてみたい。これが本日の趣旨でございます。

二　対露危機と復古神道神学の形成

早速本論に入っていきます。普通の理解では、世界資本主義に東アジアが包摂されるのは一八四二年、アヘン戦争での大清帝国の敗北ということになります。私は一七九〇年代からの対露危機がその初発の時期ではなかったかといま考えています。それ以前の日本人、そして幕府という武士国家の西洋理解はオランダによって代表され、出島商館長の毎年の江戸参府が幕府への臣従の誓いを可視化するものだと思われていました。しかし、ロシアの対日接近そのものは一七八九年のフランス革命に触発されたものであり、一八〇五年の大ロシア帝国全権使節レザノフの日本開国要求に対するそっけない幕府の拒否は、ロシア帝国からの対日戦争の危機もつくりだした。しかも、一八〇六年から七年の樺太、択捉、利尻へのロシア艦の攻撃は、一八〇八年、イギリス艦フェートン号の長崎侵攻と結びついてしまいました。西洋を代表するものはもはやオランダではなくなり、かわってロシアとイギリスという巨大な軍事大国となり、しかも、西洋の優れた科学技術の背後にキリスト教というきわめて強い唯一神を信仰する宗教がつながっていたのです。

西洋の全世界包摂の動きは非キリスト教世界へのキリスト教の布教とその浸透から開始します。そして、キリスト教布教と浸透は、一方でその卓越した天文学を中心とする自然科学研究、他方では天然痘治療を核とする近代的な医療技術と結合していました。注意してほしいのは、この動きは非キリスト教世界全体に対する動きだったということです。それに対抗しうる神をもちえなかった地帯では、キリスト教が新しい宗教になっていきます。いまのアフリカ

大陸でも広大な太平洋の島々でもその実践地域になりました。

しかし、この近代科学技術と結合したキリスト教の挑戦は、イスラム世界にもインドのヒンドゥー教世界にも、そしてビルマやタイの上座部仏教の世界にも、儒教・仏教・道教の支配する中華帝国の世界にも挑まれたものでした。いかに対峙し、土着の信仰をより体系的で、より民衆の心の中に根を張ることのできる宗教に成長転化させることができるかどうか、その土地土地の在来の神々を信じる人々自身にとっての切実な課題となってきました。

さて、幕末期になると、林子平、高山彦九郎、蒲生君平の三人の知識人が寛政の三奇人として再評価されることになりますが、彼らが生きていたあいだは人に顧みられることのない奇人の扱いをされつづけました。しかし私は、この三人は対露危機に直面した日本の危機を彼らなりの関心に沿って憂慮し、その対策を考えようとしていた人々だと見ています。戦後七十年以上たっても依然として狂信的な勤皇家とだけ評価され続けているのは、彼らにとって不本意なことではないでしょうか。篤胤もこの三人が抱え込んでしまった切実な現在的課題に正面から取り組んだ知識人だと私は思っています。

しかし、取り組み方は人それぞれの気質と性格によっておのずから異なったものになります。篤胤は、キリスト教的に表現すれば、神の恩寵を体の中に満たすことのできる宗教的な気質の人物でした。そして、体にしみ込んだ秋田藩士大和田家の学問朱子学は、その理気説と典型的な天動説のため、西洋の最新科学によって見事に破砕されてしまいます。他方で、彼が養子に入った備中松山藩の平田藤兵衛家は山鹿流兵学を家の学問とするサムライの家でした。西洋の脅威から日本の独立を守る闘いと、自分の魂を安着させなければならないという二つの課題を彼は自分自身の課題として抱え込まされてしまったのです。この課題を抱えるなかで学問をしつづけ、その過程の中で本居宣長の『古事記伝』に遭遇することになったと私は理解しています。

篤胤が師宣長から最も教えられたことは、「天地は死物にして心もしわざもあるものではない」との命題です。天、地、そして気というものが全くの死物であるならば、この天地を動かすものは神の御心、そして神のみしわざ以外のなにものでもありません。篤胤は一方では西洋の諸学問をキリスト教も含めきわめて貪欲に吸収すると共に、宣長の『古事記伝』の中にある直毘霊、そして神代巻第十七巻の末尾に付された服部中庸の『三大考』を手がかりに、儒教説も仏教説も徹底的に拒絶した復古神道神学を構築してい

きます。その成果は、一方では『千島の白波』となり、他方では『霊能真柱』となりました。

ごく最近、ようやく日本人の知識となった地動説をもとに、天御中主命を創造神とする神道神学を体系化し、日本を世界のもととする、他に求めることのない自足した「うまし御国」と定めます。この神に嘉された六十六ヶ国二島の御国の御民、その人々の魂の安着を得させるために、あえて師説に対抗せざるをなかったのが霊魂の行方の問題でした。霊魂は黄泉国に行くのではなく、この現し世の世界の真っ只中の幽世の世界に止まり、幽世から家と子孫を加護しているのだと彼は主張します。この主張は復古神道神学のなかに地域と産土神の位置づけをしっかりと定着させることになりました。この問題をより深く考えれば、いかに現世に生きることが苦しくても、この現し身が生きること自体、実は可能性に満ち溢れているのだという生命観が広まってきていることにもなるのです。そのためにこそ百姓株を維持し、その百姓株を核として、父母をはじめとする祖先並びに自分の村を大事に守り維持しなければならないということが百姓の生活意識の中に確立してきたことを、篤胤はしっかりと見定めていたのだと私は理解しています。

三　天保期に遭遇する試練

篤胤は『霊能真柱』で見通しをつけた復古神道神学をいかに日本人男女のなかに普及していくかに腐心します。在地名望家でもある神職たちへの影響力を強めるため、吉田家への働きかけもそうですし、『天満宮御伝記略』は寺子屋の師匠を同時に意識したものです。『医宗仲景考』は各村々にいた漢方医を読者に想定しており、宮負定雄の『草木撰種録』は在地の名主、庄屋、そして篤農家をターゲットに絞り込んでいます。六十六ヶ国二島の御国の御民と天子との情義的共同体こそがその出発点になる以上、農業と百姓は篤胤の神道神学の基礎になるものでした。小西藤右衛門の『農業余話』の文章を小西と鋏胤が対話をしつつ、すべてについて共同で練り直したこともこのことと結びついています。この作業を鋏胤が完了したとき、篤胤は「種々のひじり何せむ齋庭穂を八束に作る田人し有れば」との歌を詠みました。さらに百姓の家、町人の家は夫婦共に円満であって初めて成り立つものであり、しかも、女性のほうがいい加減な夫よりも信仰心の篤いもの、『宮比神御伝記』は、松尾多勢子が最も感銘を受けるものになりました。

しかし、順風満帆に続くかに見えた篤胤の復古神道神学

は、天保期に入ると大きな試練に遭遇することになりました。百姓の家の存続は篤胤が考えていたほど容易ではありませんでした。天保期には一八三三年と三六年に二度の大飢饉が襲い、しかも一つの飢饉が二年にわたって続きます。「御民等の財掠る村長は世の盗人の種といふなり」と歌うように、飢饉の時、餓死者を出さないように努めるのが村長の役目だと言い続けてきた下総国香取郡松沢村の名主宮負定雄が気が狂ったと一八三四年三月に手紙で気吹舎に急報した同村熊野神社の神職宇井出羽は、この直後の八月、大原幽学の性理学に基づいた農村復興運動に参加することになりました。『霊能真柱』を執筆するその時から有力なパトロンであった駿府の豪商新庄道雄は一八三四年、「御差支の段は万々承知仕候え共、先便申上候通にて、何分当時難出来、殊に申上も無之候え共、其御地も御同様、米価貴きこと、示の如くにて、市中の人気先月以来大に騒立候」と、『玉襷』刊行に財政援助はできないと返事をします。飯米を配らねばならない窮民が一万数千人出てきている状況です。この天保四年の大飢饉は全国的なものであり、天保四年八月六日、東濃中津川宿でも一五軒がうちこわしにあっています。「夜明け前」世界の平田国学を考えるうえでの前提がここにあると私は思っています。

皆さんご存じの一八三七年六月、生田万の蜂起、柏崎陣屋襲撃は、歴史学ではこの年二月の大塩平八郎の乱の刺激と説明されています。ただし、私はもうすこし平田国学内から迫ってしかるべきと思っているのです。彼は平田国学の教材として、漢字を学習するテキスト『千字文』をモデルに、復古神道神学による日本歴史理解を『古学二千文』に著します。そこには儒仏伝来以前の日本を「薄税寛刑」の理想時代としました。領主は天子のみよさしとして民をあずかっている立場、この窮状をなんとしても見過ごすことのできないと思い詰めてしまったのが、彼のサムライとしての性格もあったでしょう。この襲撃となりました。しかし、この一揆は気吹舎に甚大な影響を与えることになりました。篤胤は幕府から生田万との関係を厳しく問われることになります。気吹舎からすれば相当の点数の生田書状が存在していたことは明々白々ですのに、われわれが調査した気吹舎史料からは一点の書状も残存していないという事実は、とりもなおさず、気吹舎の受けた衝撃の大きさとその対処の仕方を物語っています。

このような社会はこのままのかたちで存続しうるかの疑問は、大塩事件からの影響を受けないまでも、復古神道の立場からしても当然のこととして起こるべくしておこる疑問でした。日本の神々がこの事態をどのように凝視し続けているのか。生田万の乱が一八三七年六月に起こったとす

れば、翌年の三八年、四月から八月の五か月間の長期にわたり柏崎の対岸、佐渡島において、将軍代替り巡見使来島を機に、現在では「天保一国騒動」と命名されている佐渡島全島挙げての佐渡奉行所長年の苛政を糾弾し、百三十一件の米商・豪商をうちこわす一国騒動が展開します。この統制のとれた大闘争のなかで頭取百姓上山田村善兵衛の参謀となり、訴状の起草、戦術の指導を一貫してとったのは羽茂郡村山村白山権現神職宮岡豊後でした。彼は気吹舎門人ではありませんが、本居宣長の国学を奉じた神道家であり、当然、前年六月の生田万の蜂起、そして家族を含めてのその悲惨な結末も熟知してきた人物だったのです。宮岡は取り調べのなかで獄死しますが、「生存ならば死罪」と判決されました。

生田万は余計なことをしてくれたと篤胤が思っていなかったことは、代々木の平田神社の神前に奉ぜられた石灯籠に生田万の名前が刻まれていることからも推察できます。また、秋田にいる篤胤に会って入門したいと一八四三年、北国街道を北上していた鈴木重胤は、柏崎を通過したときに「世にまさばとはんとおもひしますらおが　かばねこけむしかなしきろかも」と歌をよんでいます。国学者の思いがここにも滲み出ていると私は見ているのです。

四　アヘン戦争からペリー来航までの平田国学

対露危機は一八一三年に収束し、これで対外問題は存在しなくなった、可能なかぎり外国との関わりをもたないことが幕府存続の前提だとの考えから、一八二五年には無二念打払令が発せられ、日本の海岸に外国船を決して寄せつけない政策がとられました。鎖国意識はここに完成形態をとることになりました。しかし、西洋の科学技術とその軍事力、その背景としてのキリスト教の全世界的展開はいよいよ本格化し、一八四二年には儒教・漢学の祖国大清帝国がイギリスに大敗して開国を余儀なくされ、しかも、この結果、香港がイギリス領土にされてしまうことになりました。日本近世を外側の世界史から見れば、対露危機が第一段階、アヘン戦争からは第二段階に入ったということになるのです。漢学・儒学への信頼度が揺るぎだしたと共に、清国にまで軍事的脅威を及ぼしているイギリスはすでに仏教の祖国インド全体を植民地にしているのだとの知識も、日本人男女の共有知識となってきました。

私はこの時期の平田国学のあり方を検討するうえでの一つの手がかりが、常陸国土浦在新義真言宗善応寺僧侶良哉が還俗して佐久良東雄と名乗り、大坂座摩社の社人となって活動する動きだと思っています。東雄は、まだ僧侶時代

の一八四二年十二月、アヘン戦争で清国が敗北したその直後に気吹舎に入門、平田国学者となり、翌年の四月、歌人仲間であり経済的パトロンだった土浦の豪商で地域派国学者色川三中の家で還俗式を行い、佐久良東雄と名乗り、江戸に出、塙次郎にも入門することになります。三中は穏健な国学者です。当時の国学者の通例どおり、朝廷のみいづに輝いていた上古から中世の混乱を経て、当将軍家によって朝廷を尊崇し四海の四夷を平定する天下泰平の世に建て直されて二百有余年という歴史的理解をしており、東雄の思想的変化を苦々しく思い、そのうち経済的援助も打ち切ってしまいます。他方で、東雄は幕府そのもののあり方を露骨に批判し出します。一八四四年五月、江戸城本丸が焼失したとき、「まつろはぬやっこことことつかのまにやきほろぼさむあめのひもかも」との歌を詠んだと伝えられています。東雄においては上代への復古思想がきわめて明瞭になるのでした。この東雄の焦燥感は対外問題の深刻化に深く結びついたものでもありました。

一八四四年、琉球にはフランス艦が来航し、宣教師フォルカードを那覇に滞在させ、そして長崎にはオランダ軍艦がオランダ国王の親書をもたらして日本の開国を勧告しました。東雄はこのことを「異国船来航につき」と題して長歌で歌っており、反歌を六首詠んでいます。「かかる時心のどかにある民は　木にも草にも劣りてあるべき」「かかる時せむすべなしともだにおる　人は生きたる人とは云はじ」という歌も作ります。ついに意を決して一八四五年、弘化二年ですが、江戸から和泉国に居を移し、一八四八年になると大阪座摩社の祠官となります。東雄はこの座摩社の神職渡辺資政の全面的援助を受けながら、復古を促すべく木活字も利用しながら出版活動を始めるのでした。一八四九年には篤胤の仏教批判書『出定笑語』を木活字本で出版します。当時、国教的存在の仏教を正面から批判すること自体、危険極まりないことであると共に、篤胤は一八四三年に死ぬまで秋田追放のまま、しかも著述禁止の身でした。江戸の気吹舎は東雄に厳重に抗議し、使われた木活字と摺本を江戸に送り届けさせることになります。ただし、東雄は懲りないままでした。没収されても相当部数手元に置いて売っていたのです。次に彼が試みるのが、宣長の政治批判書、有名な『秘本玉くしげ』の木活字本化です。一八五一年、和学講談所から出版許可を取るため、九月に江戸に出てきますが、当然、出版は不可。ただし、すでに印刷した分は塙次郎門人の身分に免じ黙認という灰色裁定が下されます。しかも、『秘本玉くしげ』も相当部数刷り上げており、東雄は非合法販売で収入を得ていることになります。

こうなってはザル禁令になってしまいます。そうはさせじと周到に出版活動そのものの息の根を止めてしまうのが、伊勢外宮神職で国学者の足代弘訓でした。事の起りは一八五一年十二月、伊予大洲の有力神職、皆さんご存じの常磐井中衛が東雄と組み、篤胤の「巫学談弊」を木版本の形で出版しようとしたことです。版元はすでに決まっているのです。足代は座摩社に強い影響力をもつ中山忠能家に働きかけると共に、幕府から出版禁止の指令を獲得し、大洲にまで自分の門弟を出向かせて、版木没収の手続きをしっかりととるのでした。以上のような動きからしても、東雄はどのようなかたちで、気吹舎の意向にさからってまで復古神道の普及を図ろうとしていたかがよくわかるのです。

そして、この時代の復古神道の動きを側面からよく物語っているものが、松浦武四郎の嘉永五年の日記です。そこにはこう書かれています。「近年は世間に倭魂といへる人多く出来り、平田篤胤の著せる出定笑語又は妖魔考、巫学談弊其外、本居大人の書にては玉鉾百首、直日霊等を坐右に積て、我こそは儒仏の二教は末々迄も見破り、皇国の道こそと、在郷の伯父伯母の家々年始状にも仮名文にて、我家こそ神代より接り気なしの家風にして、何か一言二言話の時には神代神代と申人多く出来りて、物かたゐぢにて、世の用には聊も立かたきもの多し」と書いています。

そして、この年二月に帰省して足代に会います。足代は彼にこう言っているのです。「山田宇治辺も皆其通り（国学流行）、国を隔て畿内に行とも、又其通り、四国筋へ渡るとも皆其如し、如何にも平田流の流行以来は、広き世間もせまくなりし様に覚えげる。我家へ歌よみとて来る輩皆平田流にして、唯出定笑語等見たる計にて大天狗になり、竺土も漢土も無二無三に言なして、其上神祖のこととても、未だ見もやらで、東照宮には仏に帰依し等、頻に罵る輩多く、如何にも残念の世の中なるべし、是則、胸の狭きよりしてなるべし」と武四郎は記録しています。そして、足代は神儒仏三教の理解として「書をひろく閲れば聖の道の賢きことも、法の道の又妙なることも有べし、別て神祖のことと云るものは中々筆状すべきに余りあることなし」と語っていることは、江戸時代の正統的な神儒仏三教並立並存思想をよく表していると私は思っています。

しかし、史実の問題としては、十九世紀に入ると、日本人男女の心をつかむ宗教は日本の神々をその信仰の根本に据えることになりました。儒教も仏教もそこに加わることは不可能になりました。国民的常識になっている新興宗教の黒住、天理、金光の三教にしても、小谷三志の富士講にしても、井上正鉄の禊教にしても、梅辻飛驒の烏伝神道にしても、ことごとく日本伝統の神々からその宗教的生命を

獲得しています。篤胤の復古神道はその布教の対象を意図的に社会の中層以上に置き、俗神道と見なされやすい著作は決して出版を許さず、写本のみの伝播でしか認めなかったものは除外して、そのほかは、松本久史さんが研究されているように、一般民衆に向けての布教が中心となります。なぜこのようなことになっていったのか。十九世紀日本社会を考えるうえでの一つの基本的テーマがここにあると私は思っているのです。そしてこの傾向は、将軍と旗本・御家人・大名と家臣の関係を、上位者が絶対的に優先する君臣の義、主従の義を強調し、百姓・町民を呼び捨てにすることは当然とする儒教的封建教学とはいやおうなく矛盾することになっていきました。

父述斎の命を受け一八三〇年、第三子林檉宇が宣長の「直毘霊」を激しく攻撃する沼田順義の『級戸之風』に序文して、「宣長の説は仁義を坐するに逆誅を以てし、名教を擬するに詐偽を以てするに至る」と『級戸之風』を持ち上げ、また、父述斎の命を受け一八三三年、第六子林復斎が賀茂真淵の『国意考』を激しく攻撃する沼田順義の『国意考弁妄』に序文して、「老荘の近似を剽掠して上古の淳質に傅会し、以て自然の大道と為す。賀茂真淵、本居宣長、師友授受、皆此物也、検校城長、既に科戸風を著し直毘霊を掊撃し、今又弁妄一書を作り、国意考を排斥す、辞弁じて義正しく、彼徒をして得てこれを読ましめなば、或ひはいましめ無きにあらず、即ち其辞費をいとわざる也」という段階に入ると、篤胤の命運は危うくなるのは当然のことでした。

一八三四年、幕府の圧力により尾張藩は扶持米支給を打ち切り、そして、幕府の差し金が入ったのでしょう、門人旗本から借りていた土地を取り上げられ、一八三五年十二月にははるか離れた根岸の地に引移らざるをえませんでした。そして一八三七年六月の生田万の蜂起がおいかぶさってきます。一八四〇年、『大扶桑圀考』は絶版処分とされ、ついにこの年十二月、秋田への追放と著述活動禁止が厳命されることになりました。

私は幕府の神道系宗教への過敏すぎる弾圧は、平田国学弾圧と関連させて考えるべきだと見ているのです。禊教の井上正鉄の三宅島遠島処分は一八四四年のこと、江戸の平田銕胤は秋田の篤胤に報告して、正鉄は「儒仏の道を借事なく天下は治る」と主張したと四四年二月の書状に書いています。また、一八四七年、烏伝神道の上賀茂社人梅辻飛驒には八丈島流罪が言い渡されますが、彼の罪状の一つは天保の大飢饉で餓死者を出したのは「人君の不徳、人民の餓死をも不構は苦労無之境界にいる故のこと、生霊死霊可恐」と政道を正面から批判したことだったのです。そして、

一八四九年九月には神儒仏三教のいずれにも入らない新儀信仰との理由で、きわめて多くの人々が信仰している富士講を禁止することになりました。いずれもアヘン戦争後の儒教・漢学への信頼が大幅に低下していく時期での宗教弾圧だったのです。

五　幕末期「夜明け前」世界の平田国学

一八五三年のペリー来航は、世界史的に日本を見るならば、対露危機、アヘン戦争に次ぐ第三段階に入ってきたのです。日本は開国されることによって現実に世界資本主義への包摂が開始されました。たった四艘の黒船に幕府国家権力が対峙しえなかったこと、これはとりもなおさず将軍、大名、サムライの武家階級が人口の九割を占める百姓、町民から支配者として年貢・夫役・御用金を取り立てる資格があるかという根本的問題を白日のもとにさらすことになりました。漢学・儒学でニカワのように固められた将軍と大名、大名と家来のサムライという身動ききかない封建的な主従関係へのサムライの疑問、新たな忠誠の対象としての日本全体を象徴する朝廷の存在がいやおうなくここに浮上することになります。主君島津斉彬に従い初めて出府した西郷隆盛が、出府直後、一八五四年四月十四日、気吹舎に自身で顔を出し、その後さらに三回も訪問、気吹舎の出版物を購入するのは、その一つのあらわれでした。この危機におけるサムライの主体性の模索をそれは示唆しているのです。

そして藩校の動きでも、それまで軽視され続けてきた国学・古道学がようやく教えられはじめました。気吹舎の門人で薩摩藩士後醍院真柱が「此節造士館において古道学の教師被申付、国中の有志者一同の喜び」と銕胤に書通するのが一八五八年四月、そして一八六〇年三月三日、桜田門外の変に衝撃を受け、九州遊歴を開始する将来の土佐勤王党首領武市半平太はただ一冊、『霊能真柱』だけをこの遊歴に携えるのでした。気吹舎当主銕胤も嫡孫延胤も、ご存じのとおり身分は秋田藩士、サムライでした。延胤は一八五九年八月、「真の君臣とは王臣のこと、主従の君臣は乱世の余風、天下の公道にあらず」と断言するに至るのです。幕末期は復古神道が神職を先頭に日本の隅々にまで浸透していきました。しかも、それは神職・サムライだけではありません。百姓・町人の間にも深々と浸透していったのです。その中でも篤胤以来のつながりもあって下総の地は宮負定雄をはじめ伊能穎則・清宮秀堅、そして伊能の弟子鈴木雅之などの力量ある国学者を輩出していきます。それと共に、「夜明け前」世界である東濃・南信地域が新たな平田国学の拠点となっていきます。一方の下総地域は雑穀生

産地域であるため、横浜開港によって大きく経済が変わることはありませんでしたが、東濃・南信地域は昭和恐慌の時期まで日本を代表する養蚕・製糸業地域でした。地域の養蚕・製糸に関わる商人たちが横浜開港を見逃すわけがありません。中津川の間半兵衛、その姉婿であり中津川で医者兼漢学塾教師の馬島靖庵も、かき集められるだけの生糸を横浜に持っていき、一八五九年の第一回目の居留地外国商人との取引きでは大もうけし、その帰りに江戸の気吹舎に直接顔を出し、入門の手続きをするのです。

その彼等は横浜で始めて世界資本主義と接触し、そのまっただ中で掛け引きし、運良く大きな利害をあげることができたのです。しかし自分たちが商人として私的利益を得ることが日本にとっての国益となるのかどうか、しかも彼等の入門した一八五九年九～十月、朝幕関係は幕府の「無勅許開港路線」をめぐって大分裂の時期に突入してしまったのです。更に居留地外国商人達は、治外法権によって、日本の法律が全く機能しない侭、彼等は預った生糸商品を勝手に売り払っても、その金を渡さず、しかも神奈川奉行所はこの訴えに全くの及び腰というていたらくです。

そして間半兵衛達が一八六〇年再度の巨利を狙って横浜に出た年は、洋銀相場の暴落と居留地商人の不法行為によって大損を出してしまいました。

このように、「夜明け前」世界の豪農・豪商が平田国学に入っていく契機は、思想が外から入ったというよりは、彼らの日常生活、日常経済そのものが、日本とはいかなる国で、自分たちはいかに生き、いかに生活しなければならないかを考えさせられるなかで起こってきたものでした。そして、それを他地域よりたやすくしたのは、この地域では、百姓・町人を呼び捨てにし、「土百姓の分際で」と叱り飛ばす恐ろしい武家とサムライの影響力がごく弱かったということです。中津川にしたところで尾張六二万石の強圧的な直轄藩領ではなく、木曽福島関所を預る尾張藩の重臣でありながら、幕府旗本でもある山村甚兵衛家の私領でした。ご他聞に洩れず長年の窮迫、山村家とその家中の財政は中津川豪商の支援なしでは全く成り立たなくなっていたのです。

南信にしたところで、南信にあるのは飯田藩と高遠藩という小藩のみ。あとは幕領・旗本領・他藩の飛び地と、サムライが常駐する地帯どころではなく、年貢徴収は在地の村々の庄屋、名主の力によってようやく実現できる土地柄でもありました。経済的に裏打ちされながら、平田国学が乾いた土地に雨が浸み渡るように浸透していきました。「愚民小民とは乍申、銘々御百姓共の儀、乍恐御地頭様御預の御百姓にて、元より御民は忝くも大君の御民に候」と、

私的に使われる山村甚兵衛家の御用金はこれ以上負担することはできない、ただし、孝明天皇の大和行幸にお殿様が出兵するならば、何千両でも出しましょうと、主客顚倒の建言をするのが文久三年八月の山半間半兵衛なのです。

しかも、この地域の状況をさらに加速する事件が翌年十一月に起こってしまいます。幕末維新史ではマイナーにしかとりあげられない武田耕雲斎率いる筑波西上勢の信州進軍に際してです。彼らは木曾谷福島の関所突破困難と和田峠での激戦後は伊那街道を一路南進、南信州から名古屋に向う中馬街道に出る戦術をとりました。とすると、伊那街道の要衝、飯田城下の真ん中を南下することになります。飯田藩は幕府への立場上、やむなくお城に籠城、城下町を焼き払う焦土戦術をとることになりました。当然、飯田城下は上を下への大騒動となります。

ここで局面を大転換させたのが、南信と東濃の平田国学者です。南信の座光寺村北原稲雄。今村豊三郎の兄弟、伴野村松尾多勢子の長男松尾誠哉、中津川の間半兵衛・市岡殷政と連絡を取り合い、西上勢の中にいる平田国学者の仲介で藤田小四郎と直談判を行い、火の海となる飯田城下町を迂回させ、しかも名古屋に向かえば尾張藩との激突は必至、同志のいる馬籠・中津川経由ならばなんとか無難に西に進むことができると説得、しかも、飯田藩があずかっている清内路関所を無事に通過させるべく飯田藩に要求、ほっとし、同意をした飯田藩はすぐさま指令を出し、この結果、十一月二十六日、馬籠島崎正樹の本陣に宿泊、十一月二十七日には中津川で昼休みをとるという方向に変わります。

ところが、飯田藩は幕府の怒りにふれ、無事に通過させよとの指令を受けた清内路関門の二人の責任者に切腹の命令を下しました。あまりの無理無態にいかった責任者の一人は息子を連れて高野山にまで逃げます。しかし追い掛けられ、つれもどされ飯田城下で腹を切らされました。これによって東濃・南信の平田国学はサムライ階級を尻目に、この地域の政治勢力そのものに成長しました。この地域の気吹舎入門者は急増、平田国学は一八六五年からはさらに北信地域に広がっていきます。吉田麻子さんの研究にあるように、小諸に大和屋吉兵衛という気吹舎出版物を取扱う書店まで出来るようになるのでした。

六　王政復古後の平田国学

王政復古の必然性を論じたものの中で最も傑出しているのが、王政復古直後に書かれた平田延胤の『復古論』です。彼はその中で、建武中興の失敗とはことなり、「今度の復古は右に反し、万民元弘の覆轍を恐れ居るが上に、草莽よ

り勤王の論起り、最初は浪人より始りて藩士に及び、藩士より大夫に至り、大夫より君侯に及ひ、終に草莽の発起尽力より日々に盛んになり、自然に復古したるなれば、万が一も上の思召は変ずるとも、万民の心が変ぜざれば、武家に政道の戻るべき道理なし、況や近来の形成を見よ。能く治め得たりや否や、日々に乱れ果たるにあらずや」と彼は断言します。それも当然のことです。薩長のような藩権力に一切依拠することなく、下総、東濃、南信などの門人をはじめとする全国的な平田門人の活動に日夜接触し続けていた彼は、この気運と活動は逆転させうるものではないと確信をもつことができていたのです。王政復古の理想的過去は天子と六十六か国二島の国々の御民との情義的共同体です。今回ようやく実現した王政復古により、「新たないにしえ」がここから始まるという期待がわき出てきます。だからこそ大政奉還の直後、島崎正樹は長文の祝詞を書き上げ江戸の気吹舎に送ります。そこでの第一に新政の禁ずべきことは、みかどにはむかう行為であり、第二に外国と通ずる外患罪となる行為であり、そして第三に百姓を虐げる行為なのです。この祝詞は、彼が木曽山林解放運動に挺身する宣言となるものでした。

王政復古当初は、期待していた新政が展開されるかに見えました。神仏分離令は全国隅々まで徹底して行われました。国教的存在として権力に保護され続けていた仏教の地位はなくなり、ようやく神職は寺院の支配から解放され、自らの信仰に従っての神葬祭も可能になりました。この点では私は信仰の自由がようやく保証されたという側面を評価すべきだと思っているのです。全国の各藩は藩から超越した存在として位置づけられた太政官制度のもと、府藩県三治一致体制により積極的に大改革を断行していきました。各藩では、藩主と藩士の関係がゆるめられ、サムライは王臣との性格をもたされはじめました。

しかし、明治三年九月の太政官政府の指示に従って一万石につき常備兵三十名との制限がしかれることになり、一万石の小藩、苗木藩ではそれ以外の二百数十名の士族をどうするかという検討を迫られることになり、平田国学者の青山直道を中心とする藩政執行部は平田国学の理解、すなわち保元・平治の乱以前はサムライそのものが存在していなかったという理解を踏まえ士族の帰農政策に取りかかりました。あまりにも当然のこと、彼らはこの府藩県三治一致体制の半永久的存在を前提としてとりかかったのです。ただし、維新変革は幕府倒壊と王政復古では終りませんでした。ご存じの岩倉具視の明治三年十二月の鹿児島行きと西郷隆盛の引き出しから、明治四年七月十四日、廃藩置県の断行にいたります。この時点では、平田国学はなんらの

役割をはたすことなく、むしろ妨害者的存在とみなされてしまいました。一八七一年三月の国事犯事件にかこつけての平田国学者の一斉捕縛、そのうえではじめて大嘗祭は東京で挙行するとの布告、これは通史のなかで位置づけるなら、府藩県三治一致体制の放棄と廃藩への助走政策といえるものなのです。

戦後の歴史学は、悪いことは平田国学のせいだとすれば事が済むのだとでも思ったのでしょうか？神仏分離も廃仏毀釈も国家神道樹立もすべて平田国学のせいにされてしまいました。しかし私は復古神道と国家神道は全く別物だと思っています。一八七一年五月の神社班位令は伊勢神宮を全国神社のトップに据えたヒエラルキーをつくりあげ、しかも、神職の世襲制を全国すべての神社に至るまで廃止してしまいました。平田国学の有力な担い手たちは、しかしながら在地の世襲的神職であり、同時に在地名望家でもあった神職の人々でした。三河の平田門人代表者は羽田野敬雄ですが、彼も神社から切り離されました。また、文政から天保期、上総神職の代表的存在であった玉崎神社神職弓削春彦の跡継ぎも玉崎神社から切り離されてしまいました。伊豆の国一の宮の三島大社も全く同様、このため三島大社からは現在、古来から伝来されていた貴重な古文書類は一切なくなっています。このような復古神道が全く予想できなかった中央集権的郡県制国家にいかに対応しなければならないか。王政復古迄は草莽として一致団結たたかってきた気吹舎門人はここにいくつかに分裂していくことになりました。

この過渡期について、あと一つ言及しなければならないのは、明治元年から四年にかけての気吹舎門人の全国的急増をどのように考えるのかという問題です。

一八六八年の王政復古によって、それ迄の吉田・白川の神職補任制度は機能しなくなり、全国の神職の人々は、その代替行為として当時神祇官で権威をもっていた気吹舎に入門したのだという考えは遠藤潤氏のオリジナリティーに属するものですが、私は彼の意見に賛成しているのです。全国的に見ると、この時期は在地の豪農・豪商の入門は副次的なものになっていると、私の調査の範囲では判断しているのです。

さて、この分裂は東濃・南信でも見られることです。『夜明け前』の主人公のモデルとなった島崎正樹にしても、古代からの名社飛騨国一宮の水無瀬神社の世襲神職・社家との対立を犯しての神官としての赴任となりました。阪本是丸氏の研究された角田忠行の熱田神宮神官就任にしても、それまでの世襲神職・社家と対決することが不可避だったのです。

私が知る限りでの対応のパターンを整理すると次のようなものになるでしょうか？

まず苗木藩の帰農政策は完全に失敗、一八七六年末、苗木の青山邸は放火され、「百年は郷里に帰るな」と苗木から青山家は離脱せざるを得ませんでした。

しかし、東京の気吹舎はこの大変革を延胤の病死はあったにせよ肯定的に考えることになります。神社と神職を仏教と寺院から完全に分離させる狙いは見事に実現、しかも全国の神官の圧倒的多数は平田国学的な神道神学に立っている。教部省政策では合同布教こそ挫折したものの、神官の教義用テキストとしての気吹舎出版物はめざましい売れゆきを示しており、平田神社も公認され、本教教会も門弟の尽力によって組織され、全国の平田門人を目下この教会に組織しているのだ、これが最晩年の銕胤の極めて楽観的な見方だったのです。

ですから、私は国事犯事件を以て平田国学の終りとは見ておりません。

では、奥三河稲橋の古橋源六郎と神官佐藤清臣の場合はどうでしょうか？豪農で地域名望家の源六郎はなんとか殖産興業で地域振興を図ろうとしますが、松方デフレの中、彼が最終的に見定めるのが、地域民衆と一致協力しての山林経営でした。そのための精神的拠り所が佐藤清臣の神官活動と神社を中心とした地域共同体創りとなります。これは全国的な政治動向からすると、反民権運動と立憲帝政党支持の動きとなっていきます。清臣自身が極めて興味深い経歴の人物、彼の個人史を調べるだけでも平田国学と復古神道の様々な側面に迫れると私は思っているのです。

ところが南信ではまた異なる動きとなりました。地租改正反対運動は、越前七郡においては自由民権の闘士杉田定一の指導によって展開しますが、南信においては一八七六年に無理やりに押しつけられた地価があまりに不当だとする地価修正闘争が今村豊三郎を始めとする平田門人達によって担われ、そして見事にその要求を貫徹してしまうのでした。自由党が介在する余地はなかったというよりは、この地域は既に幕末期平田門人達が主体となっての地域レヴェルでの政治主体が形成されていたのです。平田国学の一つの柱、地域そのものが日本という国家の担い手になるのだとの考えが現実化されたのがこの地域だと私は見ています。

東濃ではまた別の動きとなりました。全国的な民権運動の中でも中津川民権と名づけられている民権運動が平田門人第二世代によって展開されていくのです。但し平田国学に代って欧米思想の流入といった単純なものではありませんでした。国会開始は人民の権利だと訴える者が、一八七

〇年に気吹舎に入門し、美濃国一宮南宮神社神官となる高木真蔭という人物です。彼は中津川の市岡殷政とごく親しい神道家なのです。真蔭の神道思想の根本には、復古神道の一つの根幹的柱が据えられていました。民衆の魂は父母から与えられただけのものではなく、神によって授けられた貴重此上無いものであり、授った魂を磨き、それを十全に発展させなければ神に対し申訳けの無いことになる、国家が地方官会議を組織するならば、民衆においても府県からの代表者を結集する場を創り、自由に意見を出していき、その中で民衆の神から授けられた生命を発揮させる世界をつくっていかねばならないという論理を展開するのです。この建白を受けた太政官左院は、これは民選議院論に同じとの批評を附することになりました。

おわりに

私は平田国学、あるいは復古神道が宗教的発展をとめられたのは一八八二年一月の、神官宗教行事従事禁止令によってだと思っています。人々の心に日本の神々への信仰を根づかさなければ日本は国家の独立を保てないとの信念を抱いた島崎正樹は、中教院や神道事務局活動を誠心誠意おこなう中で、明治政府の政策に絶望の思いを深めていき、一八八六年十一月、座敷牢の中での狂死に至りました。その有様は『夜明け前』に述べられている通りです。

あと一つの対応は教派神道の中で復古神道の信仰を生かし続けようとすることでした。熱田神宮の神官をつとめる角田忠行は、自分ではかかわることが不可能であっても、教派神道の一つ大社教布教の中でこの考えを継続させようと、一八八二年の年末、幕末以来の心置きない気吹舎同門同志の市岡殷政に、中津川での大社教教会組織の立ちあげを依頼しています。

また平田家第四代を継いだ養子の平田盛胤は、民社東京神田神社に奉仕しつつ、数多くの人々の神葬祭と年祭を大社教の立場から主催することになりました。気吹舎史料の中で大量に残されているのが盛胤が作成した祝詞ですが、そこでは幽世の故人に顕世の妻や子供達のありさまを克明に伝え、しかも一字一句への精魂込めた祝詞の末尾には、故人に呼びかける盛胤の短歌が添えられているのです。彼はこの気力の尽き果てる幽世の故人との祝詞対話を実現させるため、生卵をいくつも喰み込んでから祝詞執筆に着手したと伝えられています。ご静聴有難うございました。

発題Ⅰ

宗教史から見た幕末維新期の平田国学

遠藤　潤

ご紹介にあずかりました遠藤です。「宗教史から見た幕末維新期の平田国学」というタイトルで三十分の発題をさせていただきます。最初に通時的理解ということで、配布したレジメと史料にもとづいて説明させていただきます。

今回の発題では、最初に宗教史から見るということについてどういうことを考えるのかというお話をいたします。先ほど宮地先生の講演にもありましたように、平田国学にはさまざまな側面があります。とても多くの方面での活動を展開しており、それに対して、私は、自分の専門が宗教学ということもあって、平田篤胤や平田国学は宗教の面からはどのように見えるのかという関心をもって研究をしています。特定の側面から見ることによって見落としてしまうところがあるかもしれませんが、逆に宗教という面に特化することで見えてくることもあるのではないかと考えています。

全体の構造としては、宗教史から見るときに、大きく二つの側面があると思います。一つは教学や思想です。篤胤の思想内容には、いかなる宗教的要素があるのだろうか。篤胤の場合は神祇崇拝に関しての学問が中核となりますが、それが思想の面でどのような宗教性をもっているのだろうということです。二つめとしては、社会組織あるいは社会集団としてどういう特徴をもっているのだろうか、社会集団として平田国学は世の中にどのように展開したのか、あるいはほかの集団とどのように関わったのかということがあろうかと思います。

後者の面、社会組織や社会集団については、とりわけ神職組織との関係が重要かと思います。篤胤の門人組織である気吹舎と神職組織との関係、具体的には吉田家や白川家に代表される、神職を朝廷にとりつぐ位置にある公家の関係が中心になってくるわけですが、篤胤や気吹舎がそのような神職組織とどのように関わったのかというのが問題の中心になると考えられます。それから、組織の面では吉田家や白川家に関わらない部分としては、のちに教派神道の教祖として扱われる人々がおり、平田国学とそういった人々、あるいは民間信仰やFolk Religion、すなわち民俗宗教と関係というのも重要です。ただ、私が注目してこれまで見てきたのは、どちらかというと、平田国学の思想や活動と吉田家・白川家との関係が中心でした。今回は、神職組織の問題とそれとは区別される宗教者や民俗宗教の問題の両方について示していきたいと考えています。

レジメの「論点」というところで、以上の各側面について紹介していますが、各側面の紹介で時系列が前後して複雑になるといけないので、その前に「通時的整理」を示しておきました。ただし、これは篤胤あるいは平田国学に関わるすべての事項を網羅するものではなくて、私が関心をもって見ていたものがおおよそどの時期に属しているかということを便宜的に示したものです。篤胤の上京、文政末、天保年間、篤胤没後、文久年間、維新前後という各時期を設定しておきました。これらの各時期がそれぞれ平田国学における大きな山、重要な時期としての意味をもっているのではないかと考えています。

平田篤胤は、ご存じのように、寛政七年に江戸に出てきて活動を開始しますが、文政六年に京都に上ります。このときが、篤胤の活動における最初の重要な時期だったと考えます。ここでは、服部中庸らが先導する形で篤胤は上京し、重要な人物たちと会い、また、京都周辺にいたさまざまな人たちと交流をしていきますが、そのなかでも特に重要な二点を挙げたいと思います。一つは、仙洞御所・禁裏御所への献本が実現したということです。すなわち、光格上皇と仁孝天皇に対して篤胤の書物を献じることができたということですが、これは簡単なことではありません。仙洞御所については富小路貞直、禁裏御所は六人部節香と六人部是香がそれぞれ媒介することで書物の献上が実現する。書物を宮中にお見せしたいという気持ちは、篤胤においてこのあともずっと持続するところで、これは注目する必要があるでしょう。もう一つは京都に行っているあいだに、江戸時代に神職の人たちを最も多く束ねていた公家の吉田家と交渉をもって、江戸に戻ってきたあとに吉田家の学師

という位置に任命される。これについては後ほど詳しく触れたいと思います。

それから文政末年には生田万の活動が顕著になります。先ほど宮地先生の講演のなかにもございましたが、生田万が吉田家学頭輔助という位置に就くのが文政十一年四月のことです。吉田家は十八世紀末に江戸に役所（出張所）を設置していましたが、文政十二年にその責任者である目代の後継問題というのが起きました。これは気吹舎と吉田家にとって重要なできごとでした。

それから天保年間について、私は最近、篤胤が暦研究に関心を深めていく時期として注目しています。この時期には篤胤の著書『大扶桑国考』が、輪王寺宮や進藤隆明を媒介者として宮中に献呈されています。それから、篤胤の秋田藩士身分への復帰が天保年間にあります。ただ、これが篤胤のなかにおいて積極的な意味を持つかどうかは検討が必要です。それから、吉田家と対抗しつつ力を取り返そうとしていた白川家がこの時期に関東学寮を創設して、篤胤を含めた四人が学師に任命されています。天保十一年五月のことです。しかし、同年十二月に幕府による江戸追放という処分が決定されて、翌年一月に秋田に戻ります。

こののち篤胤が亡くなったすぐあとの動きとしては、篤胤に対する白川家からの神号授与があります。さらに下って、文久年間前後には白川家関東役所と連動して気吹舎が動くということがあって、これには関東役所の責任者である関東執役に就いていた古川躬行という鍵になる人物がいました。そして文久年間ですが、仏教関係書籍の刊行とそれに対する仏教のほうからの批判というものが生じています。

維新前後にはやはりいろいろな問題が含まれていますが、私としては、宗教や神祇信仰やそれに関わる教学的な問題のなかでまず興味深いと思われるのが、明治の早い時期に国民の教導・教化のために設置された宣教使という存在があります。そこにおける平田国学の教学という問題があって、最も知られているのは黄泉国の所在地をめぐる論争で――実際には宣教使のなかでいろいろな教学的なテーマがある中での一つがこの黄泉国なのですが――黄泉国がどこに位置するのかをめぐって大きく意見が分かれたため注目されています。維新後にこのような動きがあったことは平田国学を考える上で重要だと思います。

以上、この後の議論をわかりやすく説明するために時系列に沿った概略を紹介しました。

それでは次に論点をいくつか紹介していきたいと思います。

レジメで示したように、論点としては、大きく（一）社

会組織の面、（二）篤胤と輪王寺宮、（三）篤胤と天文方、（四）篤胤没後の気吹舎と白川家、（五）仏教批判書の刊行と反批判を挙げました。（一）はさらに、①篤胤・気吹舎と吉田家、②篤胤と白川家、③篤胤と土御門家の三つに細分化されます。

最初にもお話ししましたが、私が平田国学を宗教史の面から見たときに、いちばん注目すべき問題と考えるのは、吉田家・白川家という当時の神職を掌握する家と篤胤や気吹舎がどのように関わっていったかという問題です。これは構造というか、非常に大きい問題として考えると、気吹舎というのは学問組織でありますが、いまの宗教団体のように自分のところの教学が出来たからといって、あるいは自分たちの門人が集まったからといって、そのままに教団が形成することができるという存在ではありませんでした。つまり、江戸幕府の決めた制度の枠組みで言えば、神職であるということは、諸社禰宜神主法度（神社条目）という基本的な法令に基づいて公家が朝廷に取次をして、そういうことが可能な人が神職になります。この取次をする公家については、基本的には諸社禰宜神主法度が出された段階ですでに執奏が決まっている神社はそのままでいいが、これから新しく神職として何らかの許状をもらおうということであれば、それは吉田家を通しなさい、ということが定められていました。これに対して白川家という家もやがて吉田家と類似したかたちでこうした神職の朝廷への取次役の働きを果たすわけです。いずれにしても、神職になるということは身分的なそういう制度のもとにおいて気吹舎そのものが神職になったり神主になったりということができる組織ではありませんでした。しかしながら、こういう面を逆に生かしながら、気吹舎は神職組織に深く関わることで自らの学問を広めると共に、神社や神職との関わりを深めていくことができました。

それでは、篤胤の活動した時期はどのような意味をもつ時期だったのか、簡単にご紹介したいと思います。十八世紀の中葉から後半は、吉田家がいろいろな意味で動揺している時期でした。考証に基づく批判、いろいろな研究に基づいてその正統性が批判されたり、朝儀によって吉田家の役割が制約されるなどの動きがありました。神職に許状を出していくうえで、本所としての吉田家は京都にありましたが、江戸に拠点を新設して東日本での活動を強化します。それが関東役所や江戸役所と呼ばれる機関の創設で、吉田家においては寛政三年、白川家においても享和二年にこうした役所が作られて、東日本方面の神職へ許状を出すことになります。先述のように、篤胤の江戸滞在期は寛政期から始まっていて、吉田家や白川家が江戸方面、広くは東日

本の各地に自分の配下の神職を増やそうという時期に重なっており、やがて篤胤にもそういう役割を期待するようになったわけです。

それでは、（一）①で示した篤胤・気吹舎と吉田家の関係について説明します。篤胤は当初、吉田家に対する批判的な書物も書いていましたが、『ひとりごと』という書物の中では吉田家をある種擁護するような動きを見せています。先ほど紹介したように、文政六年から上京して、京都の吉田家と折衝して学師というものに任じられます。この学師というものがどのような役割なのか、史料①として「宮川弾正口達書」（文政六年十二月十八日、国立歴史民俗博物館蔵「平田篤胤関係資料」一―二〇九―六―一）を挙げておきました。

この史料では最初のほうに「今般学師被仰付、以来附属配下之神職共教諭被致候様御沙汰ニ候。猶又追々諸国廻村之節者右神職共不心得之儀有之ニおゐてハ、申添之神道伝授職分継目杯、無懈怠申出候様教導相加可被申候」とあり、すでに吉田家の配下になっている神職に「教諭」してほしいということだけでなく、篤胤は自分で村を回っての「教諭」も行うようになりますが、そういう機会に当地の神職がもし吉田家の許状を受けていなかった場合は、吉田家に申し出るように指導してほしいということも願うわけです。つまり、吉田家は配下ではない神職にも許状を受けるように促すという活動を進めますが、篤胤にもそれを手伝ってほしいというかたちで、学師の役割を考えているわけです。レジメに書いてあるように、教諭する、廻村する、教導するということの内実はこのようなことです。

篤胤の学師就任にあたっては、江戸役所目代という責任者であった宮川晁晧が力を入れており、その貢献が大きかったようです。

篤胤の意図については、史料②本居大平宛服部中庸書簡（文政七年一月十六日付、『新修平田篤胤全集』補遺五）をご覧下さい。「……平田ハ又何から成共取付候て、神道を天下に押ひろめんとの大望故、吉田家へも取入、同家之神道をも鈴屋之古学神道に改め、此御家より弘メ候て天下ニおこなハれん事を意安しと思ふより、……」とあって、篤胤は、吉田家が全国的な組織であることを活用しながら自分の説を広めたいということだと、服部中庸は理解しており、篤胤自身の意図もそのあたりにあったと考えられます。

その後、生田万が気吹舎の中で重要な位置を占めるようになりますが、そのときにも吉田家の問題が関わっています。一つは、三木広隆の著した『中臣祓本義』という書物が出されたとき、その内容を生田が激しく批判して文政八年に『三木一鎌』を書きました。『中臣祓本義』は、吉田

家江戸役所のお墨付きを得るかたちで書かれた本ですが、生田や篤胤からすると許しがたい内容のものでした。

生田は文政十一年に館林藩にいられなくなり、当初、吉田家が館林藩から生田を借用する形式をとった上で、篤胤と養子縁組をして江戸に出て活躍することになりますが、その際には吉田家の学頭輔助として、吉田家における篤胤の役職を助けるという役割を得ます。この役割は単に便宜的なものではありませんでした。史料③として示した荒井静野宛生田万書簡（文政十二年一月、館林郷土史談会編刊『生田萬　荒井静埜』一九三六年、所収）には、文政十一年十一月から十二月にかけて伊豆を遊歴した際の記事が見えます。そこには「旅行講談毎に或は六七十人或は二三十人集り、泣く者あり笑ふものあり其様徳本か今弘法の遊歴するが如く、大言向に言向けて国中更に手にさはるものなし。凡牛国計は歩き候が、其化国中に及候事疑なく、来年を契り候所数多有し、門人も随分と有之候。」とあって、地域を回ったときに「講談」をしています。これは、一面では篤胤の教説を説いて回るような活動をしているわけですが、同時にそれが吉田家としての活動にもなると見なされているようです。ちなみに、この期間には、気吹舎に生田の講釈を聞いて入門した人が三人ほどいました。

文政十二年になると、吉田家江戸役所目代後継問題が出てきます。目代というのは江戸役所の責任者です。この問題も細かく見ていくとなかなか大変ですが、前任者が不正行為で処分されて後継者を選ぶ必要が生じました。篤胤をこの後継者にしたいと主張したのが下総、上総を中心とした神職で、彼らは同時に気吹舎の門人でしたが、結果的には実現しませんでした。松岡帰厚が後任に決まりましたが、そのときには、吉田家のほうから篤胤に対して、篤胤後継を主張した門人たちに納得させるようにということも申し添えられています。

続いて、篤胤と白川家との関係を見たいと思います。篤胤の生前には、冒頭で述べたように、まずは関東学寮が創設されるという時期に篤胤が学師に補任されます。このときには書面上の記載では年を遡行させるという策がみられます。

その後、篤胤が江戸から追放されると、このことが篤胤が白川家と深く関わっていこうとする一つの局面になっていきます。篤胤は秋田に赴きますが、江戸に戻るために何か支援をしてもらいたいと白川家に働きかけをします。『伯家学則』という白川家の学問内容を篤胤が示した書物は、篤胤が秋田に行ってから執筆したと考えられており、秋田から江戸の銕胤に送られています。天保改革の時期に白川家関東執役は不正を働いたということで、次々と交代

せざるを得なくなるのですが、時期が下ると平田・気吹舎が人間関係においても白川家江戸役所と深く関係するようになります。これはもちろん篤胤の没後のことです。

篤胤と吉田家や白川家の関係については、私のものを含め、すでにいくつもの研究がなされていますが、これまで注目されていなかった公家として、土御門家という有名な陰陽道の取り締まりをしている家があります。この公家の関係者のうち、小島好謙という人物と篤胤はまず知り合いになります。そのあとに土御門の当主にも面会して、自著を献じます。ただ、後述する輪王寺宮に対する書物の献上に比べると、本の数が少ないです。土御門家との関係は、慣例的・社交的な域を出なかったようです。

配布資料で示した各項目のうち、(二)「輪王寺宮」が今回、皆さんにいちばんお話ししたいところです。篤胤の記録にはときどき「上野の宮」として輪王寺宮が記載されています。この人物が篤胤の諸活動に関連してどのような位置にあるのかというのが問題の中心ですが、その説明に先立って前提を少しお話したいと思います。

まず、輪王寺宮は円通という人物との接点があります。円通は『仏国暦象編』といって、朱子学にもとづいて天体観測をしながら制作される公的な暦に対して、仏教的な暦を制作しました。これが問題になります。円通の仏暦は一旦出版されたのちに、改めて後ろ楯を得て出版をしたいということになりますが、その後ろ楯というのが輪王寺宮でした。輪王寺宮は寛永寺の当主であって、輪王寺の門跡です。この位置は基本的には天台宗の頂点で、非常に重要な位置を占めている門跡であります。この門跡が保証するという判を押したとして、仏教的な暦に基づく世界観を示したような書物を出していくわけです。

この輪王寺宮と円通と篤胤の間に少し接点があります。円通の書物に対しては、土御門家の小島好謙が批判書を出しました。暦という問題は、従来の平田研究の中では比較的手薄なところですが、篤胤は晩年に暦に関心を集中させるということについては、すでに指摘があります。早い時期に出された『霊能真柱』、そのあとの歴史研究で古史・古伝の研究である『古史伝』は、よく知られており、わりとスムーズに理解がされますが、晩年、暦の研究に集中していったということは、篤胤の学問への志向性のなかで少し説明がしにくいところがありました。

この暦の問題を考えるときにキーワードになると私が思うのは、「暦象」ということばです。近世の朱子学の枠組みでいうならば、暦というテーマは、単に暦を考えるだけではなく、天体の運行を観察することが必然的に含まれるような問題としてあるわけです。この枠組みを踏まえて篤

胤の学問史を考えると、最初『霊能真柱』という世界像を考えるような書物から入っていきますが、そのあとに世界の形成を歴史へと展開した古史・古伝の研究を進め、さらに暦のところまで触れていくという篤胤の軌跡は、世界像への問いから暦象に関する包括的な問題関心に到達した結果、暦への関心を強めたものと把握できます。

さて、人間関係の考察に戻ります。輪王寺宮には、そこに仕える進藤隆明という人物がいますが、篤胤はこの進藤と密接な親交を持ち、彼を通じて輪王寺宮との関係を保ちます。それを通じて『大扶桑圀考』という書物を献呈していきます。「気吹舎日記」の記事などから、この献呈の経緯を具体的に知ることができます。篤胤は進藤隆明を通じて輪王寺宮に接点を持ち、そして書物を光格上皇や仁孝天皇に献本するに至ります。この献本は篤胤に対する幕府の処分を考える際に重要な意味を持っていると私は考えます。篤胤が幕府から受けた一連の処分のなかに『大扶桑国考』の出版差し止めがあります。幕府とは無関係に、篤胤が宮中とのルートを確保していて、上皇・天皇への献本が大変スムーズに実現してしまいます。その窓口になっていたのが進藤隆明なり輪王寺宮であるわけです。朝幕関係の間の微妙なところに、篤胤、進藤、輪王寺宮の人間関係が位置しており、今後、篤胤の晩年の状況を再検討する際にとても重要になってくるのではないかと考えています。

続いて（三）「篤胤と天文方」に進みたいと思います。篤胤に対する幕府の処分において他方で問題とされたのは『天朝無窮暦』でした。この書籍に関しては、篤胤と屋代弘賢を軸に話が展開します。まず、『天朝無窮暦』は天保八年十二月に成立します。同書巻一には執筆意図に関する次のような記載があります。「今已に聞くに堪ざる悪言ども、耳に入れば、師の琢きにみがき明されし帝道唯一なる皇典の学びの甚き汚濁と成ぬべきを最慨たき事とひとり竊にむねを焦がして在ぬれど、明らむる由なくて黙止在しこと三十年余なるが、時なれる哉、ことし天保八年といふ年の六月に至り、其惑ひ忽に啓けて、実にも書紀なる暦日はも皇国に固より有つる暦にして、伊邪那岐大神の立創めまし、大国主神の謂ゆる合朔に調へ給ひしを、大朝廷に用日させ給日、其よりして赤県州を始めあだし戎国々へも及ひし祖暦なることを悟り得たり。……」（『新修平田篤胤全集』一三、一〇一―一〇二頁）「気吹舎日記」天保十一年三月二十八日条に、銕胤が「無窮暦差出之事ニ付、屋代氏へ行」くとあり、これが一連の動きの起点かもしれません。その後の経緯も「気吹舎日記」である程度、追うことができます。幕臣である屋代弘賢は老中の水野忠邦に相談（五月二十九日）の上、林述斎（大学頭）に同書を提出しました（六

月一日）。述斎からは窓口が違うと差し戻されて（六月八日）、屋代が再度水野に相談の上、今度は天文方である山路諧孝に提出し、渋川景佑にも見せるようにと伝えます（六月二十四日）。山路からは「賞賛詞」と「論状」が出されます（八月八日）。進藤隆明からの「伝書」を銕胤が山路に渡し（八月九日）、山路から進藤に返信がなされます（八月十六日）。これは輪王寺宮を通した献本とは別のルートで、屋代弘賢から老中水野忠邦を通っていくというようなものが計画されています。『天朝無窮暦』と『大扶桑国考』は、篤胤晩年の処分理由になったのではないかと考えられている点では共通しているのですが、献本の経緯を視野に収めたときには、両書はこのように別の人脈によって献本が図られており、いったん区別して考える必要があります。さらにここから、屋代側の人間関係や輪王寺宮に関わる人間関係を改めて問い直すことで、篤胤の思想的な位置というものを再検討することが可能になるわけです。従来の研究では、暦に関して土御門家が介在したとする指摘もありますが、ここでの経緯を見る限りそのようなことはありません。また、天文方から意見が出たあとで進藤が動いているのは、二つのルートを考える上でも気になるところです。

時間が残り少なくなりましたので、（四）「篤胤没後の気吹舎と白川家」、（五）「仏教批判書の刊行と反批判」については、簡単な紹介にとどめておきたいと思います。まず（四）ですが、篤胤が亡くなったときに気吹舎と白川家との関係が少し変わってきます。篤胤が秋田退去後に白川家に求めた役割というのは、自分を必要だと主張してくれる存在、江戸あるいは京都に上らせることを求めてくれる存在というものでしたが、亡くなった後、時代が下ってくると、古川躬行という人物が白川家の関東執役になったときにピークを迎えますが、この人物が活動したときには白川家の入門と気吹舎の入門が重なるようなかたちで活動が考えられる。つまり、神職が白川家に入門するということで気吹舎に学ぶということで、より密接に関わるというのがこの時期の問題点です。詳しくは拙著『平田国学と近世社会』をご覧下さい。

一方、（五）ですが、仏教批判書の刊行については、その時期の意味に関して気をつける必要があります。文久年間に、それまで出版が許されていなかった気吹舎の仏教批判書が出されます。仏教者はこれに対して反批判をすることになりますが、文久期に出版に踏み切ることの意味は改めて考える必要があり、また、幕末維新期の気吹舎の宗教的な側面について考えるきっかけになることかと思います。こちらは以前に「幕末における国学・仏教と国家―平田国学の仏教批判と仏教からの反批判―」（『國學院大學大学院紀

要文学研究科』四七、平成二十八年）にまとめました。

最後に「小括」としてこれまでの論点をまとめたいと思います。ひとつ目は気吹舎の吉田家・白川家の関係をどう理解するかという点です。先述のように、基本的な枠組みとしては、気吹舎という組織は単なる学問組織ではありませんが、他方で宗教的な役割を全部自分のところでまかなえるわけでもありません。具体的にいえば、神祇についての学問を充実させつつ、神社・神職の制度的な組織は別に必要となるということで、この二重性や重層性というのは幕末に至るまで維持されます。二つ目として、暦をめぐる問題系についてです。これは「暦象」という、天体・世界像と暦をともに含む問題系についてで、これは天体・世界像、古史・古伝、暦の各問題に分化します。レジメには、暦象に関する篤胤の問題関心の展開として、『霊能真柱』（天体・世界像＋古史・古伝）、『古史伝』に代表される古伝関係著作（古史・古伝）、晩年の暦関係の著作（暦＋古史）といった段階を試論的に示しておきました。篤胤における暦の問題は人間関係においても思想を考えるうえでも実は非常に重要であると同時にまだ課題として残されている問題で、これについていろいろな検討が必要であろうと考えます。維新後にどの部分が継承され、あるいは発展され、どの部分が忘れ去られるようになったのかということも今後の課題です。

時間の関係で説明不足の箇所もありましたが、以上で私の発題を終えたいと思います。ありがとうございました。

発題Ⅱ

佐賀藩の国学・神学

三ツ松　誠

三ツ松でございます。限られた時間に対して分量の多すぎるレジュメを持ってきてしまいましたが、文章の形でまとめてありますので、ぜひ興味がおありの方にはそちらをご覧になっていただければ、と存じます。

先ほど宮地先生がお話しくださったように、気吹舎資料あるいは平田篤胤関係資料、これが閲覧可能になったことで、二十一世紀に入って平田国学研究がたいへん進みました。とくに秋田藩士でもあった平田家が運営する家塾気吹舎、そしてそこに集った門人その他の関係者、あるいは南信・東濃の門人集団。こういった対象について研究が進展しました。

これに対して、八十・九十年代の実証的な近代神道史研究は、それまで平田派と一括されてきた明治維新期の復古神道家たちを、平田直門や津和野派、薩摩派などと、分節化した点に、その達成を認めることが出来ると思います。明治初年の平田直門が、「平田派国事犯事件」に象徴されるように維新後まもなく没落したと評価されていることは、今回のシンポジウムの趣旨文にも書かれております。これに対し、実際に明治初年の宗教行政を牛耳ったのは、大国隆正の影響を受けた津和野派、長州閥と結んで神祇行政を担った福羽美静や亀井茲監だった、と明らかにされました。あるいは津和野派の退陣後、薩摩藩出身の国学者たちが留守政府の薩摩閥の後押しを受けて教部省に入って活動する様子も明らかにされました。明治維新を機に、国学者たちが新政府に入ってどんな形で神道国教化策を進めたのか、詳しい検討が進められた、というのが八十・九十年代の研

究の達成だったと思います。明治十五年の神官教導職分離に至るまでは、明治四年までに失脚した平田直門の人たちに限らず、広い意味での平田派、平田国学の影響を受けた諸グループが、復古神道家として政府内部で活動していたのであって、その内実が詳らかにされた訳です。

翻って、宮地先生の先年まとめられたご本『歴史のなかの『夜明け前』』（吉川弘文館、二〇一五）を見てみると、最初に問題意識がはっきり書かれております。「幕府・朝廷・大名・サムライといった幕末期日本の支配的諸集団とは別個に、被支配階級の人々が如何にペリー来航後の情報を収集し、判断し、主体性を模索の中で形成し、そして政治的な行動に出ていったのか」。つまりそもそも、平田国学を受容することによって主体的に行動する国民となっていく、という層こそが宮地先生のご議論の主人公なのでした。要するにこのご本の主人公は、八十・九十年代の研究の主役だった新政府内部の国学者グループとは、別なのです。明治政府のなかで影響力が大きいグループと言えば、やはり薩長土肥といった藩閥諸勢力になると思いますが、近年進展した平田国学研究の主人公は、彼らではないのです。そして薩摩・長州については先述の通り、結び付いた国学者集団についての詳しい研究が既にあるのに対して、佐賀について、肥前については、あまり研究がなされていない。そこで今日は、これについて説明をさせていただきたいと思います。

まず「幕末佐賀の学問」について。ここ、手短にまとめます。いちばん言いたいことは、幕末佐賀というのは、水戸と並んで全国でもっとも学問が先鋭的・過激に進んだ藩であり、そのなかで国学も大きく展開する、ということです。

そもそも近年の日本近世・近代史研究で、大きく注目されているのが朱子学、とくに佐賀出身の古賀家が注目されています。彼らは朱子学者でありながら西洋の文明についても非常に興味をもっていて、明治政府になる前の外交活動を担った幕府の役人には、古賀家の影響を受けた人が多かったといわれております。松平定信の時代の後、佐賀藩校から幕府昌平黌に登用されたのが古賀精里であり、その三男の古賀侗庵は幕府に仕えて大きな影響を残し、近年注目を集めています。それに対して長男の古賀穀堂は、佐賀にあって藩校弘道館の先生として弟子を多く育てたといわれます。その中でいちばん有名な教え子は、実は学者ではなく、のち幕末期の佐賀藩主となった鍋島直正になります。

ご承知のとおり、江戸時代というのは世襲制の身分制社会です。二本差しの侍にとっていちばん大事なのは、戦争で功績を挙げることです。では、戦争がない時代が続くと

どうなるのか、誰がいちばん偉いのか。それは先祖が戦功を挙げた人です。そういう時代ですから、勉強してもあまり報われない時期が続く。しかし平和な時代が続くうちに社会に朱子学が普及していきます。何をやっても出世できない、市場経済が拡大するなか米建ての給料も目減りする、これではモラルハザードが起きてしまう、ということで、寛政期以降、道徳的に優れた人間を目指す朱子学が武士の間で推奨されるようになっていきます。藩校を設けて朱子学を勉強した人間を評価する、場合によっては出世させる、という動きが全国的に広まっていきます。

こうした動きの中で、いちばん過激な形でそれを実践したのが佐賀藩だ、と私は思っています。佐賀藩では、朱子学の先生だった古賀穀堂の改革案、この影響を受けた鍋島直正が教育改革を行います。大規模な藩校拡充を行い、幕末期には新しい仕組みが取り入れられます。文武課業法といいますけれども、ちゃんと藩校に入って定められたカリキュラムを修め、試験に合格しないと、武士であっても先祖伝来の家禄をちゃんと相続できない、あるいは仕事を得られない。江戸時代なのに、勉強しないと職務に就けず、親代々のものを相続できない、そんな仕組みを佐賀は取り入れてしまったのです。その結果、全国的にも類を見ない、勉強して学校に通って切磋琢磨して優れた人間が出世していく、こういうシステムになった訳です。そして医学についても、西洋医学に基づく医学教育のカリキュラムを修めて合格し、医師免許を取った人間でないと医療を行ってはいけない。医者も、勉強して能力を試験によって証明した人間でないとやっちゃいけない。こういう仕組みをつくります。さらに、穀堂という人は国学の勉強も大事だといっておりまして、神主さんについてもみな学問吟味、試験を受けないといけない。それによって能力を証明しなければいけない。こういう状況になっていきます。後述の神学寮という神主さん向けの国学の学校もできます。このように、武士も医者も神職もみな、世襲制が当たり前の世の中、江戸時代なのに、学校に通って勉強して試験に合格しなければいけない。佐賀ではそんな仕組みをつくってしまう。こうした状況で佐賀の学問は大きく発達するのです。

では「佐賀の国学」にまいります。まず明治維新以前に活躍した有名な国学者を何人か紹介します。国学といっても、歌、物語と神学とを区別している研究者が多いのは御存じの通りです。そのうち歌のほうで有名なのは古川松根という人です。桂園派の歌人です。鍋島直正の側近、「ご学友」というかたちで評価すべき人物で、直正が亡くなった後は殉死します。思想の方ではなく絵画とかデザイン、和歌、書道、こういう分野で有名な人です。

この古川松根の和歌サークル仲間であるのが、南里有隣という先生です。こちらは直正の娘の和歌の師を務めたといわれます。やはり桂園派の歌詠みではあるんですけれども、同時に彼は江戸では和学講談所、京都では平田篤胤の初期の門人である六人部是香に学んだ、国学者です。彼は地方史に関する本、文学に関する本を遺すだけでなく、神道学に関する研究も行っておりまして、日本思想史学をはじめた学者の一人といわれる村岡典嗣さんのご研究で取り上げられています。彼は平田篤胤に次いで、キリスト教教理の漢訳書の研究を進め、そこから復古神道神学を作った人ということで、高く評価されています。ただし、具体的にはそこまで研究が進んでいない、そういう人になります。

おそらく佐賀藩の国学の先生として今もっとも有名な人といえば、枝吉神陽になります。藩校弘道館の教諭で闇斎学の流れを汲む漢学の先生でもあって、江戸の昌平黌にも留学しています。昌平黌で初めて中国の漢籍だけでなく、日本のもの、国典も勉強するようにした人物でありまして、平田派随一の碩学矢野玄道と交際したり、佐賀に戻ってから国典も教えたりして、大隈重信等を育てます。楠木正成を祭る義祭同盟を結成し、佐賀藩の尊王攘夷派の多くの志士に影響を与えます。ただ、コレラで明治維新を迎えずに亡くなってしまって、吉田松陰同様、育てた弟子の有名さによって知られています。副島種臣にとって兄にあたり、島義勇にとって従兄弟という人物です。

副島種臣は後でも見ますが、神陽と同じ家に生まれた人物でありまして、彼も藩校弘道館の先生になっているのですけれども、特徴的なのは、家中で彼だけが儒学ではなく国学で留学をしていることです。その留学先は京都であり、谷森善臣や六人部是香に学んだといわれています。そういうわけで、佐賀藩では藩校弘道館で教えた先生の中にも国学の先生がいたのです。

さらに武士向けの藩校弘道館だけでなく、神学寮といわれる神職向けの学校も嘉永年間から生まれています。そのときの記念の祝詞が六人部是香のもとに書き送られています。さらにその後安政年間には、牛津、いまは小城市ですね、佐賀の隣の自治体ですが、そこの乙宮社の日記を見てみると、「神学寮御国中社人試之御立会」、つまりは神学寮で国中の社人みなが試験を受けさせられていることが分かります。ということで、神職が厳しい勉強を行っているのがこの神学寮なのです。ほかにも神学寮には森若狭や先に述べた祝詞を書き送った藤原貞紹といった関係者がおり、いずれも六人部是香を先生と仰いでいます。

ということでまとめます。佐賀藩では神主向けに学校が設けられ、試験も導入され、彼らのみなが勉強しなければ

ならなかった。そしてこの学校で教えるなどした人々の先生に当るのが六人部是香であった。その結果、おそらくは平田篤胤の影響を間接的に受けた神主がたくさん生まれていた、というのが佐賀の状況でした。そうした人々の中から明治初年の宗教政策に関わる人々がたくさん出てきております。

そこで次に見るのが「明治維新と神道家」です。最初に挙げるのは柴田花守。この人は詳しい説明が必要になる人だと思います。というのも、不二道の影響を受けている人なんです。もともと小城藩、今の佐賀市の隣が小城市なんですが、そこの藩士の家来の家から出て、本人も絵師として藩士になったようです。しかし、もともとはシーボルトの孫弟子にあたるかたちで医学の修業をしていた。ですけれども、おそらくはシーボルトが処罰されたことと、体調の問題があって、長崎でさらに西洋医学を続けるということになりませんでした。その代わり絵師としての修業を積むと共に、長崎に出てきていた不二道の小谷三志の弟子になります。富士講で肥前が出身というのは珍しいですね。絵師としては琴岡という号をもっています。また長崎の方では、国学の先生として熊本藩出身で長崎で長く活動した中島広足、この人のお弟子さんになります。中島広足が佐賀に行った後には、柴田花守に自分が書いた本に挿絵を描いてくれるように頼んでいる、そういう関係が知られています。あるいは人によっては端唄の「春雨」というものを御存じかと思います。彼が長崎の丸山というところの料亭で遊んだ時に作ったもので、いまに至るまで踊りに使われております。小城では花見のシーズンに長崎検番の方を招いて舞を披露してもらうイベントが行われています。

この人は小谷三志の弟子として不二道の神道化を進めることになりました。富士講の一派である不二道は、幕府に対して積極的に認めてほしいという活動を繰り返した結果、厳しい処罰は出ないのですけれども、富士講そのものの禁止令が出てしまう。おそらくは由来のよくわからない民間信仰として弾圧されたのだろう、という判断の結果でしょうか、公的に認められている信仰、これに不二道の信仰を似せていくという形の改革が行われたようです。その過程で柴田花守は、平田篤胤の影響を受けた復古神道にグループを寄せていきました。

彼のグループは明治維新以降、完全に神道化して、国民教化に協力し文明開化を翼賛するという立場をとります。明治初年には新たな天皇のもとでの治世に賛成するのですが、そこで新しい文化が導入される際、新しいものに日本の古代の先例を付会して導入を肯定するのですね。新しいように見えて、実は皇国では古い昔からやっていたことな

のだから、拒絶しないで受け入れていこう、と。また、キリスト教が入ってくるので対抗しなければと、神道国教化政策にも協力し、神社界に関わります。一時期は大阪の豊国神社にも勤め、たくさんの文明開化の方針を肯定して新政府を翼賛する神道的著作を残しています。明治十五年になると、神道国教化政策の時代が終わり、神社神道から教派神道を分裂させるような時代が来ますが、そこでそれまでの不二講の組織を教派神道化した実行教の管長になっています。花守はまた平田門人にも数えられ、神代文字を肯定する著作を残しています。当時、神道国教化に協力した佐賀の神道家たちは他にもおり、彼らの多くは神代文字派でした。

この柴田花守の後継者は息子の礼一という人です。十九世紀の末にシカゴで万国博覧会があった際に、シカゴ万国宗教会議というのが併せて開かれますが、これはキリスト教の優越性を前提にしつつも、世界の宗教の協力というものを掲げた、そういうイベントとして知られています。この時、神道界から唯一参加したのがこの柴田礼一だといわれております。そこでは世界の宗教の目的の究極的一致・協力を説くという会議のテーマを肯定する演説を行っております。大会のテーマを肯定したのは、独自性を主張できるだけの英語力が無かった日本人の通例だとも言えます。しかし一面では、平田神道も究極的には世界中の宗教は一致するという立場をとっていますから、復古神道の影響、平田篤胤の神学の影響を受けて世界中の宗教の共通性を肯定できた、と言えるのかもしれません。日本国内の宗教の対立を緩和させるということで行った三教会同、ここでも彼は神道家として協力しています。

そして花守の次男納富介次郎。この人は弟さんなので養子に出ていますけれども、花守と同じく長崎で絵師の修行をします。文久二年に幕府船が上海に渡って、ヨーロッパの進出によって事実上の植民地になっていた上海の租界を見てくるのですが、これに絵師として参加した人物です。キリスト教勢力によって偉大な中国はいまではかつての威勢を失っているという状況を認識する。その時の経験を、父の花守と一緒に各地を廻ってキリスト教の危険性を伝える中で話し伝えています。のちに彼は佐賀出身の佐野常民のもとでウィーン万博やフィラデルフィア万博の出展にも携わり、日本の工芸教育の先駆者として有名になりました。全国に四か所の工芸学校をつくっています。

次に西川須賀雄。この人は花守の弟子であるともに、南里有隣、枝吉神陽らに学んだ神主です。彼自身の神社は祇園社でありまして、復古神道の考え方でいうと祭られているのはスサノオだということになります。スサノオの八岐

大蛇退治後の「わが心すがすがし」と述べたエピソードが大好きだったからでしょうか、自社の名前も維新期に祇園社から須賀神社に変え、自分の名前も須賀雄にしてしまいました。そして、転勤した先の出羽三山でも「不動の滝」の名前を「須賀の滝」にしてしまったようです。次に見る岡吉胤とも親しく、一緒に六人部是香のところに遊学・入門しています。不二道にも入門して、角行系の独自の富士信仰説と平田篤胤の『霊能真柱』を組み合わせた『国之真柱』という特殊な神道書をまとめています。明治維新後は平田家に入門するとともに、宣教使に勤めて長崎キリシタン改宗や中央での仕事をやった後に、佐賀藩の神学寮の先生として出張講義を行っていました。廃藩置県のあと再び上京して教部省で尽力すると共に、明治六年から九年まで出羽三山に勤めて神仏分離・廃仏毀釈の責任者として知られることになります。『神々の明治維新』（岩波新書、一九七九）という安丸良夫さんの有名な作品がありますが、そこで廃仏毀釈の責任者として名指しされたうちの一人です。その後は千葉県の安房神社や神道事務局に勤めています。須賀雄は講義録を数多く残していることでも有名です。大教院開設時の講義も彼が担当しています。彼は復古神道家として現場で布教を行うことに熱心な人でした。たとえば宣教使期に、神代の難しい道理だけから尊王敬神を説いても一般人の信は得られないのでは、と説いた他の神道家に、そんなことはないと反論しています。しかし、神官教導職の分離が起きて、神社では「宗教」的な神学は教えないことになりますと、彼は師匠のやっていた教派神道実行教のほうに入ります。一時は信徒代表というかたちで大幹部となり、跡取りにもなるはずだったのですが、結局、世襲制ということになって柴田礼一が花守の後継者になります。須賀雄は一時期大社教に加わるものの、故郷に戻って、須賀神社のほか、淀姫神社の祠官、佐賀県皇典講究所講師も務めます。明治前期宗教史で語られる様々な神道的政策、そのほとんどに参加したといっても過言ではない復古神道神道家として、彼の事績は記録されています。

次に彼と仲のよかった岡吉胤という人物を見てみます。この人は今の上峰町の坊所の佐渡神社の出です。明治維新後はいわゆる「七卿落ち」の一人、澤宣嘉が幕府崩壊後に長崎に赴いた際、長崎キリシタン対策の担当者として呼ばれて、有名な丸山作楽や大隈重信と一緒にキリスト教徒教化策に関係します。この後も県から神社に関する仕事を任され、祭典に関する様々な著作を著しています。祝詞、儀式、古文の参考書等、数多く出版しています。鍋島直正の葬儀にも関与しています。廃藩置県後は、当時の復古神道家の有名人の例に漏れず、大神社の転勤神職になります。

唐津の田島神社、筑前の香椎宮や京都の八坂神社を経て、明治八年には伊勢神宮の禰宜になるという人です。伊勢神宮の改革に際して禰宜を辞めたあとは、神宮教・実行教等を経て皇祖教や大日本道徳会というものを設立したと言われていますが、大きな勢力をもつことはなかったようです。結局、三重県の津中学校や茨城県の学校で先生になって水戸で没した、という人であります。

もう一人、神学寮で教頭を務めた糸山貞幹という人がいます。この人は、幕末期に佐賀藩海軍のドックがあったということで世界遺産になった三重津海軍所というところがありますが、ここの近くの社家の息子で、この人も六人部是香のもとに留学しています。神学寮で教頭を務めたのち、やはり近くの大神社の転勤神主を務めまして、教導職としても権大講義になっています。ただし、彼は西川須賀雄や岡吉胤のようにその後に教派神道の幹部になる道を選ばず、旧制佐賀中学校や佐賀の師範学校の先生をしています。『肥前風土記』の研究や和歌の研究で業績を残しました。ただし、神道事務局の置かれた時代には、西川須賀雄や岡吉胤と並んで『神教叢語』という雑誌に寄稿して積極的に神学と神道教化について発言する人物でもありました。

時間がなくなってきたので、副島種臣についてもう少し詳しく述べて最後にしようと思います。明治初年、平田派が期待を寄せるものの結局失敗する大学校、この運営方針をめぐって政府の重役たる副島種臣が自分達の理想に応じてくれるのでは、と平田直門から期待をされます。その後の教部省期も、彼は神道家から大きな期待を受けました。これらの期待に彼が応えることにはならなかったのですが、実際、彼はある意味で大変な敬神家として生きた人物でした。同じく枝吉神陽の薫陶を受けて共に英学を修めた大隈重信が、復古神道による長崎キリシタン教化がうまくいかなかったのを契機に、国学者の無能さと神道の宗教としての不完全さを理由にそれらに早々に見切りをつけてしまう一方で、副島のほうは霊魂不滅を説いて、それを信じない連中との会合を退席したり、神降ろしを試みたりする人物でした。よく知られている話として、西南戦争に際して彼は中国に渡っているのですけれども、これは西郷隆盛にも近しく、政府の重役だったけれども今は政府と意見が合わない人物ということで、警戒対象だったからだと考えられています。そして実は、神告によれば、西郷隆盛を東京に連れてくるか、さもなくば身を隠さなければいけないと、薩摩藩出身の神道家本田親徳に言われ、結局、中国に一時身を隠すことになったのだ、と、まことしやかにいわれています。彼の全集を見ると、本田と副島の考え方には確かに同様のところが見られます。天之御中主を重視する特殊

な神学を唱えて、平田篤胤のテキストもたくさん読んだ上でこれは間違っているという。つまり、篤胤説にすら満足できない神道家だったのです。神憑りとしても有名でして、議論を吹っ掛けにきた教派神道神理教の佐野経彦にも、おかしな人物と思われたぐらいであったことが知られています。

ということで、最後、全体をまとめます。佐賀藩は幕末、朱子学者古賀穀堂の影響を受けて、非常に学問が盛んな藩になりまして、神道家たちも勉強するのが当たり前の状況になったと思われます。そうした状況の下、武士にも国学を教えていた枝吉神陽が思想家をたくさん育てますし、新政府で活躍する尊王攘夷運動家をたくさん育てます。その一方で平田篤胤の影響を受けた六人部是香、この人の許に学びに行く神道家もたくさん生まれました。そういった事情から、明治維新後に新政府と関わって全国的な活動を行った神職が佐賀には少なくないのです。柴田花守やその弟子の西川須賀雄、柴田礼一、あるいは岡吉胤、糸山貞幹、副島種臣といった人々が、復古神道家として注目すべき存在に挙げられるでしょう。藩主鍋島直正の学問奨励が平田篤胤の影響を受けた復古神道家の成長につながり、明治維新後の神道国教化政策にたどりつくことになった。これが佐賀藩の国学の現実だと思います。草莽の国学とは異なり、藩の政策から影響を受けるかたちで、平田神学が近代に特殊な展開をみせたわけです。こういうところにもっと注目していこうと思って研究している次第でございます。私の話はここでひとまず終わります。

討議

平田国学の幕末維新

講師
宮地正人（東京大学名誉教授）
パネリスト
遠藤潤（國學院大學神道文化学部教授）
三ツ松誠（佐賀大学地域学歴史文化研究センター講師）
コメンテーター
阪本是丸（國學院大學神道文化学部教授）
司会
松本久史（國學院大學神道文化学部教授）

進行（菅） それでは討議に入ります。討議に先立ちまして、コメンテーターとして当明治聖徳記念学会理事長、國學院大學神道文化学部教授でいらっしゃいます阪本是丸先生よりコメントを頂戴し、そののち國學院大學松本久史先生の司会によります討議に移りたいと存じます。それでは阪本先生、よろしくお願いいたします。

阪本 阪本でございます。時間が押しておりますので、コメントというより、感想を手短に……。まず宮地先生の基調講演でありますが、平田篤胤という偉大な国学者、その時代との関わり、それから地域だったり、民衆との関わり、そういうところに焦点を当てられた。宮地先生は、そのような観点から幕末維新期、あるいは近代の政治史的な研究をされているわけですが、きょう改めて、講演をお聞きしまして、思わずうまいなあといいますか、聞き惚れて

しまうような内容。とくに感心したのが、簡単にいえば、平田篤胤という人がもっている人間性、そして、天下国家を論じ、なおかつ民衆、地域と関わっていく、これを生涯をかけて必死になってやっていく。それがありありと生き生きと描かれて。そして時代を読む先見性ですね。こういった国学者が戦時中に違った観点からもてはやされたということで、戦後は悪のかたまりのような見方をされた。長い間そうした見方がされてきたわけですけれども、違った意味で宮地先生はそういうところではないところを見られた。こうした研究が進展したのは、さっきも出ましたけれども、ここに期待をこめて松本さん、遠藤さん、三ツ松さんとが宮地先生と一緒になって、平田神社にある平田家の記録、文書等が出たということ。これも私個人の思い入れはあるんですけれども、これだけきちっとしてこられたということで研究が進んだ。そういう意味で、各論的にも、そしてまた平田篤胤という人を見るうえでも、再認識するうえでも、また、島崎藤村の『夜明け前』、あそこに書かれているもの含めて、当時の平田国学、篤胤が生きている時から幕末にかけてのものをまとめていただいたということで、改めて、書き手の脳裏に残っているものが整理されたという感想です。

それから、遠藤さんに関しましては、篤胤が目に見える世界だけでなくて、見えない世界だけではなくて、それと「時」ですね、暦というもの。それに対する篤胤の見解。そのへんに焦点を当てられたということ。これはなぜ彼が追放されたのかということにも関わるわけですけれども、そこに焦点を当てて、これからの研究の進展が期待できるものだと思います。ただ、私としては当時の国学者と朝廷とのつながりをどう考えるかですね。そういった点から、幕府ではない、朝廷、天皇につながりを求めていく。これを、ある意味ではもう少し、いろいろな研究が進んで、具体的に解き明かされる日も近いのではないかと思います。

あと三ツ松さんに関しては、佐賀の国学・神学ですが、佐賀というのは独特なところで、さっきの話にも出ておりましたけれども、草莽の国学とか、平田国学の影響ということではなく、独特の組織あるいは藩のあり方、そこで殿様が力を注ぐこともありますが、そこで育った、影響を受けた国学者たちがいたというお話しでした。そのなかでも私個人にとって興味が尽きないのは、京都の向日神社の六人部是香という神主・国学者と佐賀との関わりに関するお話しでした。まさしく平田篤胤がいちばん信頼した関西の国学者。矢野玄道も六人部是香から大きな影響を受けている。いろいろな関係があることを知って、非常にためになりました。

松本　先ほど菅先生のほうからご紹介がありましたが、このシンポジウムの司会は、國學院大學の神道文化部の松本が務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

いま阪本先生から全般的なコメントをいただきました。私の話を最初にするのは恐縮ですが、遠藤先生含め、宮地先生たちが平田家文書をずっと調査をなさっておりまして、遠藤先生は最初のほうからメンバーですが、私はかなりあとから助っ人として入りまして、もう十年以上、ほぼ毎月定期的に研究会はまだ続いているというのが現状であります。宮地先生を中心として、平田国学に関する発表が、毎月開いても、どんどん出てきまして、またまた研究の必要があるという繰り返しであるという現状があります。この場をお借りして、本当たくさんの人に関心をもっていただく一助となればというふうに、一言、前提として申し上げたいと思います。

阪本先生よりコメントをいただきましたが、まずは各先生方にコメントに対するリプライ、もしくは、時間が限られておりましたので、今回言いたかったこと、言い足りなかったことの補足等、発表の順番でお願いしたいと思います。まずは宮地先生からお願いいたします。

宮地　時間が限られているので、ぜひ言わないと永遠に消えてしまうと思うこと、それだけ補足しておきます。これは皆さん方も共通に関心をもっていることだと思うのですが、気吹舎四千の門人といっても、篤胤大人が生存のときに四千いたわけではない。門人帳に記入されている人数の総計というのは、明治四年から五年でストップ。これははっきりしている。延胤大人が亡くなったこともあるのですが。では、明治元年から明治四年、廃藩置県までのあいだになぜあんなに急増したかという問題がある。社会史としてやる場合の大事な問題です。

一八六八年の王政復古によってそれまでの吉田、白川の神職補任制度が機能しなくなり、全国の神職の人々はそれの代替行動として当時神祇官で権威をもっていた気吹舎に入門したのだという考えは遠藤潤氏のオリジナリティに属するものですが、私は彼の意見に賛成しているのです。

私は彼に個人的にこれを早く論文として出せ出せと何回言っても出さない。これはものすごく大事な問題で、しかも、ご存じのように明治四年五月の神社班位令で世襲神職制がなくなってしまう。では、どうするか。先ほどの三ツ松さんの話ではないけれども、どう試験をやって登用するのか。その制度がない。この問題は、明治初年代から十年代の面白いテーマだと思っているので、いつか遠藤氏が論文を書くことを期待していますが、当分は私の発言を記録にとめて、皆さんお使いください。そうしないと、私も使

えないのです。

阪本　すみません。私も廃止された世襲神主家の出身です。幕末期に孝明天皇さまから従五位下・摂津守をいただいて、明治四年七月には世襲廃止で、代々奉仕していた神社を放り出されまして、格からいえば県社、私どもは郷社ですが、県社北岡神社祠官に任ずるという明治四年七月の熊本県の辞令が残っています。そこに富永守国という神風連の参謀が、郷社正院厳島神社祠官となってやって来る。これも林桜園の弟子で国学を多少学んでいる。世襲廃止によってそうした者を登用せざるをえなかった。そのへんのことを、いま初めて知りましたが、遠藤さんがやっていただけるということで（笑）。大いに期待しております。

松本　質問のペーパーで杉森さまから、神職の世襲制について説明が欲しいということで、ちょうどいまのところだと思います。ちょっと整理いたしますと、江戸時代までは神社は基本的には世襲です。これはお寺とは全然違う部分で、お寺は世襲ではなかったのです。一方で神社は基本的に世襲だったわけです。ところが、明治四年になりまして、まさに政府、太政官布告によって神職というのは「精選補任」、まさに幕末の佐賀藩のようですが、ちゃんと勉強して、ちゃんと神社祭祀をやれるような人間でないとだめなんだ、神職の子供だからといって神職をやるのはけしからんと。つまり、神社というのは「国家ノ宗祀」、いわゆる国家的な機関であって、国家的な施設である神社をあずかる神職というのは、それなりにしっかりした者でなくてはいけない、単にオートマチックに世襲じゃいけないんだという布告が出て、それ以降神職は、実態として世襲だというところもかなり多いのですが、原則としては世襲ではないというのが制度的なところです。これは明治四年以降のことです。その制度によってそういった意味で神職は非常に大きな変化があったということです。質問のお答えにもなるということです。

では、遠藤先生、よろしくお願いします。

遠藤　思わぬところからお話が出て、ここで言質を取られてしまうとは…。時々ぼくは史料に基づかないで話をすることがありまして、いろいろな状況証拠から思いついたことをなんとなく雰囲気で言ってしまったことがずっと一人歩きをして、苦しんでいます。今年、時間がすこしできましたので、七月以降、ご指摘の点はまた勉強していきたいと思いますが、普段は史料に対して受動的というか、史料を読解していて、そこからわかったことがあったら書いているような状態で、幕末維新期の神職をとりまく環境の変化と気吹舎の役割については、自分で史料の当てがなかなかついてないというところがあるので、宮地先生のご指

摘の点については、史料の捜索を含めてやり直しをしたいと思います。

発題の補足としては、なかなか伝えられなかったところが少しありました。篤胤が暦に集中しているというか、熱意をもって勉強しているときに、どの時期に集中して勉強し始めたのかという部分について、史料⑥の業合大枝・志賀綿麿・玉中玄良宛平田銕胤書簡（天保三年一月十五日付、（岡山手紙を読む会編『書簡研究』三、和泉書院、一九九〇年）をあげましたが、発題のなかでは説明できませんでした。これは中川和明さんが丁寧に論じていて、ぼくもそれに触発されて暦に関する文脈で再検討したところ、天保三年に精力的に執筆をしている様子が生き生きと示されているので、今回それを示そうと引用しておいたものです。天保三年以降、『天朝無窮暦』ができるまでちょっと時間があいています。『天朝無窮暦』の執筆の経緯についての篤胤の記述で興味深いのは、『天朝無窮暦』の完成につながる重要なひらめきを得たという記事で、それがいつなのかというと天保八年六月だというのです。

ぼくら平田国学研究者の習慣としては、このように年月が明示されているときには、まずは気吹舎日記の記事にあたって、興味深いものはないかなと探すのですが、それに関しては、例えばそのときに篤胤が閃いた、とかそれを示唆する何らかの動きとか、そういうものは日記では確認できていません。ただ、天保八年の六月というのは、先ほど宮地先生のお話にあった生田万が陣屋を襲撃して果ててしまうときなのです。なので、ここから先は憶測にもなってしまうのですが、篤胤において、この八年六月に生田が亡くなったということと『天朝無窮暦』をとにかく完成させなければならないという情念との間に深い関係があったのではないか、という点は少し考える必要があると思っています。暦を編成する上でつかえていた難問題がこの時期にわかってよかった、という単純な問題ではないのではないか。『天朝無窮暦』を広めようということを支えた情念には、もしかすると生田の死が関わるのかなというのは少し考えるところだったので、ここで話してみました。

それから、先ほど話をはしょってしまったので、天文方による改暦の話をしそびれました。改暦に関しては、寛政の改暦のあとに篤胤が江戸で活動し始めて、天保の改暦を控えているような状況にあるわけです。だから、暦に対する関心というのは日本社会でも非常に深まっているときでもあるし、次の改暦をにらんでどういう暦をつくっていくかというのは、一方では篤胤にとっては日本という国家の暦であって、実際、現実的な暦というものに関心をもっていく時期でもあります。時代が変わってくると、天保の改

暦が行われるという噂を聞きつけて、篤胤は自分の『天朝無窮暦』に変えさせたいということを言っていたりします。

なので、篤胤の自発的な見解だけではなくて、暦に関して日本社会がちょうど過渡期にあって、さらにいくと、寛政の改暦ぐらいから土御門家が外されていき、天文学方が西洋の天文学も学びながら、日食など実際起こっている天体現象をきちんとフォローしていきます。実際の天体現象に沿った暦をつくらなきゃいけないということを考えている時期です。ぼくが最初考えたのは、土御門家が篤胤に積極的に接近するという形でした。しかし、篤胤と土御門家の間でのそのようなやりとりは、いまのところ確認できない。晩年、秋田に行った篤胤が江戸に戻ろうとするときには、白川家が篤胤に指示して暦を作らせたという形式でもいいので自らの暦が採用されるように事態を進めたいというようなことを鋏胤宛の手紙での述べていて、必ずしも土御門家との関係ではありませんが、自分の考えた暦が日本の暦として採用されるということを篤胤は目指してやっていました。それがちょうど日本の基本としての暦の設定が変化しようという時期にあたっているのです。このことを補足としてお話をしておきたいと思いました。

三ツ松　私が言い足りなかった、説明を飛ばしたところは、佐賀藩の詳細な話。国学者・神道家の話でないところを飛ばしたかな、という印象がありますが、そこを詳しく説明し直しても面白くないだろうと思いますので、皆さまのコメントについて思うところを話したいと思います。

先ほど阪本先生から六人部是香のほか、矢野玄道という篤胤没後にその神学的部分を引き継いだ人の名前が出てまいりまして、また宮地先生、阪本先生から世襲神職の問題が話題に挙げられました。これらについてちょっとコメントしたいと思います。

所謂「没落」する平田直門である矢野玄道やその仲間の人々が、武士の支配が終わった、天皇の支配に戻ったという時代になって、どう考えたか。すなわち、神社は天皇家につながる存在であり、昔のように再び尊重される時代になったはずである。そこで、それぞれの世襲される神社に神戸をつけよう、社領を増やそう、と。これはある意味、領主権を強化する立場、神社を領主として強くしようという立場なのです。武家領主がいなくなり、代わって全国各地で神社が天皇家につながる重要な存在になっていく。それがコミュニティーの核となっていく。そういう方向にしようという主張が、明治初年の平田派には見られます。これに対して、実際の神社行政を主導した津和野派の人々はそういうことをしません。津和野派は、江戸時代の吉田家や白川家のように全国の神社に権利を直接与えることはし

ない、という方針でやるので、同じ新政府の中で働いていた平田直門の矢野玄道等と、大喧嘩になります。しかし新政府は、直接神社を国家に結びつけた結果、神職の世襲制度を廃止するという行動に出ます。平田直門・津和野派のどちらも神社は天皇権威につながるものとして見ているのだけれども、個々の神職の世襲的地位については、天皇権威につながらないものとして否定されたわけです。自分が調べた例でいえば、平田派の三輪田元綱は、寺請制下の仏教に代わって神道に国民生活になじんだ宗教としての地位を与え、全国の神社を直接中央官衙としての神祇官が管轄する形にして天皇権威と直結させ、そこを司る神職の地位をも高める、という在り方を夢見ていたように思われます。これに対して津和野派は、真逆の神社政策を採り、明治国家が行った身分制の解体に棹差したわけです。こうして個々の神職の多くは根付いた神社から切り離され、能力ある人間ならば転勤神職として、一種の役人としての出世はできる、という仕組みになってしまったのです。

こうしたなか、佐賀では江戸時代の頃から、神職としての学問に長けた人物が育っていました。平田系の国学が広がっており、明治初年から十年、十五年に至るまで、中央の神社界に乗り込んでいって活躍できるような人物が輩出されたのです。しかしそういった人々も、明治十五年、死後を説明するようなことは非宗教としての神社から切り離して教派神道等に任せる、ということになった際、居場所がなくなります。今回見た西川須賀雄については、世襲神職の地位が失われた後も中央の神社界で活躍し、神官教導職分離後も実行教に入って神学的知識を生かして活動しますが、結局は地域神職に戻ります。

平田国学の影響を受けた神職は、天皇を中心にした新政府が成立し、期待した未来になったと思ったのかもしれませんが、必ずしもそうではなかったわけです。それぞれの能力、置かれた場所、得られた人脈を駆使して新しい時代を生き抜かざるを得なかったのだろうな、と思う次第です。

松本　ありがとうございます。

次に、三人の先生方それぞれのご報告が非常に精密な理論で仕上がっていて、じゃあ、それをどうまとめるかというのが非常に難しいのですが、まず、遠藤先生の暦の話は、大変興味深く拝聴いたしました。このシンポジウムに先立って、三月に私が当会の例会で「明治維新と国学者」という、今回のテーマと同様の題目でお話をしたんです。そのときにも平田門人ではないんだけれども、平田学を非常に信奉したある一人の人物がいて、その人が明治二十年代に至るまで暦の本を刊行し続けているという非常に興味深い事実に気がつきました。これに『天朝無窮暦』が何回か

出てきます。

若干説明いたしますと、『天朝無窮暦』というのは、天地の開闢、つまり宇宙がいつできたかということから現在、といっても当時は近世後期ですから、まさに天保八年ですね。ここに至るまで何年たったのかということを書いています。天地開闢から神武紀元までは四万三千三百九十年とか、天孫降臨から神武紀元までは二千四百一年、その間、素戔嗚尊や大国主神が地上にいたのが何千年であるとか、そういうことを非常に細かく書いている本です。それが『天朝無窮暦』という本でありまして、実はそこが面白くて、中世のキリスト教の神父さんでそれをやった人はいます。つまり、光あれと神がおっしゃって七日間で世界をつくった。それは何年前だということと同じような話を平田篤胤はしているわけです。まさに世界の時間のスケールに、この『天朝無窮暦』は合わせているんです。この年は中国では何かあったとか、インドでは何があったと全部対応しています。つまり、阪本先生がおっしゃいましたけれども、世界の「時」を整理するというか「時を知る」ということはイコール世界・空間を把握することになります。遠藤先生からもお話があったんですが、世界像というものと時間軸というものが決まるということは、まさに偉大な作業であるということで、そこを篤胤が開拓していく。とくに、暦書というのはちょっとややこしいし、計算が面倒くさかったり、数学とか天文学の知識もないと、日食とか、このときは朔といって月の動きがどうだとか、そういうことが事細かに書いてあるから、だんだん面倒くさくなってしまってややこしくなってきちゃうんです。でも実は、天文学とか数学とか暦をやったということは、遠藤先生がおっしゃられたとおりですが、開闢から、天・地・泉という宇宙の展開、世界・空間が展開していく。そこを時系列で落としこんでいって現在に至たるという説明、そういった意味でも『天朝無窮暦』は篤胤のやっていたことの完成形、それがないと篤胤の『霊能真柱』の世界観は完成しないということなんじゃないかというのが、今回非常によく理解できたと思います。私も三月にも例会の時にもちょっとそういうことを考えたんですが、その思いを非常に強くいたしました。

三ツ松先生も論文を書いてらっしゃる篤胤門人の三輪田元綱も暦書を書いてますね。だから、暦書というのは、篤胤だけだったわけじゃなくて、門人も引き続き、その問題意識を継承していく、そういうつながりが篤胤だけじゃなくて、没後門人たちへということで明治まで続いている。ここに明治五年で太陽暦に改暦されたという出来事があるわけです。逆に太陽暦だからこそ、もともとの無窮暦が太

陽の運行に合わせた暦であったわけで。それに変えただけなのだという、そういう認識を持っていたのではないでしょうか。これは単に復古じゃないですね。つまり、現実の西欧の太陽暦に合わせつつ、そこに適合した古伝説というものを作り上げていく。

そこで、三ツ松先生に質問したいんですけれども、西川須賀雄にしても、柴田花守にしても、時代に合わせた神道教化をしていったという点ですが、文明開化に合わせつつ日本の神代なり古伝承なりに合致するんだという論法で、神道教化をしていくというのは、具体的にどのように説明していったのかをお聞きしたい。

三ツ松　西川須賀雄は、新政府で重要な位置を占めた佐賀藩の出身です。学問を奨励した佐賀藩は西洋軍事科学研究の世界でも日本随一の実力を持ち、倒幕勢力のチャーターメンバーでないにも関わらず、戊辰戦争におけるその軍事的貢献によって新政府内に重要な位置を占めました。その結果としてか鍋島幹という元佐賀藩士が北関東の栃木県令になります。飲み込まれた宇都宮藩は、山陵奉行を出して朝廷に貢献した藩ではありますが、譜代藩でもあります。廃藩置県で戸田氏は領主としての地位を失い、他所から来た知事に支配され、藩社会は大変動を蒙ったわけです。そこに教導職として西川須賀雄が出張します。彼はここで旧知の鍋島幹と協力し、廃藩置県の詔書を使って変化すべきところだけでなく変化すべきでないところをも述べて、旧領主戸田氏の功績を称えつつ、新しい天皇の治世に協力すべき旨を宣布し、聴衆の感涙を誘っています。

ほかにも、ちょっと脱線するかもしれませんが、須賀雄は平田篤胤の弟子らしく、世界は日本の神々が移って開かれることによってはじまったものであって、それゆえ日本の神々の伝説が世界中に伝わっているのだ、という発想を共有しており、エジプトのピラミッドに祀られているのはスクナビコナである、と述べています。このように、新しく入ってきた世界中の知識がすべて、神道中心的世界観の説明に活用されてしまうのですね。その意味では、平田篤胤による西洋医学をめぐる議論が重要です。篤胤は、世界中の医学も日本の神がはじめたものなのだから、もう一回西洋の医療技術を導入するのはおかしなことではない、外国は病気が流行りやすいためにそこで発達した医学を取り戻して対処していくのは正しいことだとして、西洋医学の導入を肯定しているのですね。須賀雄もこういう西洋医学についての議論を取り入れて文明の世を実現するよう主張することがあります。こういう議論に類する付会論的レトリックは柴田花守等にも見られます。

松本　いま質問したことは、まさに平田学の復古的で、

かつ西洋的な開化を吸収するというような学問的な性格があるわけですが、実際つぶさに見ると、そういうことは篤胤没後門が活躍した維新期から明治前期まであったのではないかということですね。その事を皆さんに知っていただきたいということでお話をしたんですが、その点について、たとえば宮地先生からは、とくに東濃とか南信とかの平田派の中でそういう理論があったかどうか、何か気がつくことはございませんでしょうか。

宮地　在地の名望家の家でそう簡単に外国の考えが、すーっと入ってくるということはありえない。私はそう思っているんです。中津川は明治十年代になると自由民権の本拠地となっていく地域。しかも、それの中心になるのは平田門人の第二世。この問題は日本の社会史を考えたら大変面白い問題であると思っています。いちばん大事なことは、平田国学の一つの柱が、われわれの命というのは父母から与えられただけではない。日本の神によって与えられた命がいま生きている。生かされているのだ。この考えが根強かったと思うのです。

美濃に高木真蔭、面白い神道家がいます。お医者さんで、明治三年に気吹舎に入門する人です。彼は岐阜県に中教院をつくる人間でもあるし、岐阜県の一の宮、南宮神社の神官にもなる。皆さんご存じのように明治十五年に板垣退助が遭難して「板垣死すとも自由は死なず」と言った、その中教院をつくったのが高木真蔭。この問題もじっくり考えないと、日本人の生活のなかでの神とか人民の権利とかいうものがわからなくなるのではないか。よそから入ったものはどんなものでも定着しない。日本人の生活のなかで考えているものが基本にならないとだめだと私が思っています。

松本　ありがとうございました。まさにその通りだと思います。単純に復古だとか懐古だとかいう一面的なものではないところに、幕末から維新期、まさに明治という時代があるということではないかと思います。

それで、遠藤先生にお聞きしたかったのは、明治にいたる神職の展開ということで、基本的に遠藤先生のやられたことは、まさに近世的な体制においては、吉田・白川家がいわゆる「本所」として神職を全国的に組織化する体制があって、こういう体制が要するに神職の職掌・身分についての保証をする。一方、学問というものを補完していったのが平田篤胤なのだということだと思います。維新後にそういった意味での二重性が失われて、神祇官というものによって統一されてくる。たとえば宣教使という教化組織も、神祇官の下に管轄されるというふうに集約されていくというプロセスがある。そのなかでどう平田国学が学問・教学

面で対処していくのか。遠藤先生が展開されているところがあると思いますが、何かお考えというか、構想があればお伺いしたいなと思います。

遠藤　自分は維新期について本格的にふれるような研究がまだできていません。黄泉国論争は少し書いていますが、この論争の場合は、本居宣長の『古事記伝』を読んで服部中庸が書いたように、天体、すなわち太陽と月と地球のありかたを考えたときに、黄泉国の所在地が問題になったわけですが、服部中庸も最初、黄泉国が実は地球の地中にあるんじゃないかという、いわゆる地胎説をいっているのです。服部中庸も地球の内側に黄泉国があるのではないかと一瞬考えたのですが、それが宣長との話のなかでなくなっていって、発表された中庸の『三大考』では月と黄泉が同一視されました。篤胤はそれを受けながら『霊能真柱』を書いて、亡くなったときもその説に立っていたと考えられます。地胎説は、近世の終わりになって再び主張されるようになり、明治維新後の宣教使のときに国民を教導するための論題を検討するなかで、世界の形態を考えなければならなくなって、問題は再燃します。黄泉国は地中にあるのではないか、古典をきちんと読むと地面の中に黄泉国があるから、天体的に考えるならば、その所在地は月ではなくて地中なのではないかという論が出てきます。平田延胤がその頃一生懸命宣教使において平田国学を貫こうと努力しますが、そこで黄泉国の所在地に関する激論に直面します。延胤は、そこでの議論を逐一鋭胤に報告しますが、最終的には黄泉国にあまり深入りするなということでケリがついていると思います。

明治に入って、天・地・泉をそれぞれ天体に同定するという形態の世界像を維持し続けるのはなかなか難しいところに入ってきています。それを考えると、暦は、一般的にはもっと早い時期に世界像の問題から切り離されているようなところがあります。それについてももう少し考えないといけない課題としていますが、暦の問題というのは世界観の問題としてまだ手つかずというか、ぼくのなかではよくわかってないところです。篤胤が十九世紀の初めぐらいに構成した世界像は、江戸時代には何とかもっていましたが、明治維新のときには、それがいつまで持つか、すごく試されているところがありました。

それから、最初に阪本先生からいただいたコメントと松本先生からいただいた暦とか時間軸に関する質問に答えなければなりません。阪本先生からは、幕府でやらないで朝廷・天皇というところに国学者がつながりを求めていくことの意味を問われました。これは今後史料読解を通じて具体的に経緯を追っていかなければ解明できないことなので、

自分がここですぐに答えが出すのは難しいものがあります。暦における時間軸については、『天朝無窮暦』という名称が端的に示しているということと、時間の基準は、神からずっとつながってきている天皇というところにあるというところが篤胤にとっては基本なので、そこを基準にしながら世界の暦はどのようにとらえられるか考えていくというあり方が特徴的なのだと思います。それが近代、そういう時間意識が近代にどのように継続していくのかという点は、少し考えなければならないと思っています。

松本　ありがとうございました。三ツ松先生と宮地先生も言及されていたんですが、お話の要点の時系列的な整理をいたしますと、とくに明治に関わりますが、明治四年というのは一つ大きな画期であって、神職の世襲体制が明治四年に大きな変換をした。同時に廃藩置県というかたちで中央集権の国家体制が実質的にスタートしたのが明治四年であるということが一つ。次に、何回かお話が出ておりますが、明治十五年というのも一つの大きな画期であったということであります。これはなぜかといいますと、国民教化に神職があたる。そして、国民教化のなかで非常に大事だったのが幽冥界の存在の説明、神葬祭の実施などに見られる、死後の救済というのが一つ大きな神職にとっての役割で、それが国家的にも期待されていた時代。いわゆる神道国民教化時代であるわけです。それが明治十五年に分業する。つまり神職は神社の祭祀に専念をする。一方、魂の救済とかという話は宗教に属すというか、いわゆる教派神道の役割になるわけですが、幽冥界などを唱えるんだったら神社ではなくて教団とかでやれ、そういう問題になる。神社と教導職の分離、かつ、それが実際、教派神道の成立ということになっていくわけですけれども、そのことについて、佐賀を含めてどうですか。実行教の場合、まさに万国宗教会議の中で、たとえば花守の思想がどういうふうに国際会議の中で伝わって、世界にどう発信されていき、ここに何か平田学の継承があるのかどうか。その点についてはどうでしょうか。

三ツ松　不二道の小谷三志が長崎布教にやってきた関係で、肥前に在りながら柴田花守は不二道信者になりますけれども、そもそも富士山の見えない、そうそう見に行けないようなところに信者がいるというのは驚くべきことになると思います。このグループが多分特殊なんですね。関東周辺のもともとの富士山を信仰し、富士山を見に行こうというグループとしての富士講、その広がりの中にあって、不二道は比較的発達した教説を持っていた派閥なのですけれども、それでもやはり、富士山がなかなか見られないところに居る信者というのがどういう位置になってくるのか

は、もっと注目されていいと思うのです。けれども、史料が少なくて難しい。ともあれ、そうした明らかに富士山が生活と密着していないところから出てきた柴田花守が京都の理性院行雅とともに教団の神道化を進めていく。彼にとって、富士参詣のための講社という性格の優先度が高くなかったためにか、彼が不二道教団をリードして跡継ぎとなると、かつての富士講から遠いところも存在する神道教団としてこれを運営していくかたちになり、それについていけないということで離脱者も生じていく。

結果的に、地元佐賀で花守の教団はあまり広がらない、自国に信者さんがたくさんいるわけではない、ということになっているわけです。西川須賀雄は地元に戻ってきて須賀神社に勤めたため、そちらの影響は地元に残っているのですけれども、花守の実行教については拠点が佐賀ではないのです。

ただ須賀雄も一時期は、神官教導職分離後、非宗教としての神社に帰属するのではなく、不二道教団の跡取り、実行教の後継者になることを認められていたようなのです。けれども、宮崎ふみ子さんの調査によると、須賀雄が跡目譲りの式に付随する富士登山を完遂できなかったこと、清水藤十郎筆「古記録」という稿本（実行教本庁所蔵）に書かれているそうです。やはりあまり富士山に登っていない人間だったために須賀雄は、神道家としては優れた行動ができても、信者的次元で富士信仰を布教しきることができなかったのでないか、という印象を持っています。

先ほどさらっと述べましたけれども柴田礼一は、シカゴ万国宗教会議に参加しており、そのときの講演記録が残っています。その研究者のなかで言われていることですが、言語能力の高い人間でないと向うの議論に対応することができない。キリスト教信者が中心の海外の宗教学者・宗教家に対して、きちんと英語でわたりあえる人間でないと、予定された議論、大会の基調と違うことを言えない。そして柴田礼一さんは大会の基調と違うことを言った人としては、記録されていない。彼についての記録で目立つのは、世界中の宗教の対話を強調するかたちで参加して大歓迎されたのだけれども、そこで挨拶したときに、殺到した聴衆の女性の頬にキスをしてしまって問題になった、ということです。結局、東洋人は親愛の情を示すときにキスするものだということで納得されて話は収まったようなのですが、英語を駆使してコミュニケーションを取ってわたりあった人間の側に、礼一は入っていないのですね。

とはいえこのように、キリシタンに対しての弾圧だけでなく、西洋文明の積極的受容の主張も、佐賀平田派の系譜からは出て来るのです。平田神学的には、世界のはじまり

は日本の神話に語られている以上、世界は全て日本の神々によって生み出されたものであって、その一部としての海外を完全否定する理由はないのだ、ということにもなります。こういう論理からすると、世界の宗教に共通する部分があるのは当然なわけで、万教帰一的主張や海外文明の受容も可能になるわけですね。その一方で、先ほど宮地先生がおっしゃった通り、排外主義的なところもある平田派の在り方、これをどう受け止めていくか、具体的に見て行かなければならない点はまだまだ多いと思っています。

松本　ありがとうございました。明治期に国学の影響力がどこまで広がっていたのかという点は、わかっているようでほとんど解明されていないのではないでしょうか。いわゆる『夜明け前』の大きな影響力もあって、平田国学が明治四、五年で終わっているということで、未だ一般的な理解はそうなのかもしれません。延胤没後の気吹舎の動向などは、ほとんど顧みられていません。一方では、明治期の本居派も宣長の曽孫の豊頴を中心に健在であったわけで、確かに、明治十五年は一つの画期だったかもしれないのですが、近世国学の実質的な終焉も含めて、宮地先生にお聞きしたいのですが。

宮地　われわれが気吹舎の史料を見てびっくりしたことは、明治四年に終焉したと思われている気吹舎の出版物が、それ以降すごく売れているのだという問題なのです。ですから、平田国学をどう考えるかによって、解釈の仕方が異なる。先ほどから問題になっている吉田、白川が補任して神職に認めるという制度がなくなったあと、どうやって神職を教育するのかという問題が必ず出てくる。井上頼圀の国学塾もそのような性格をもっていました。ただし、教部省政策のなかでは全国の大教院と各県の中教院が教え、それからあとは神道事務局が教える。そこでのテキストをどうするか。この問題があった以上、気吹舎の出版物というのがどうしても基本にならざるをえない。そういったときに平田国学は明治四年で終わったと言えるのか?。

私の印象では、銕胤は明治十三年の最晩年迄きわめて楽観的だったのです。但し一八八〇年に銕胤は没し、そして八二年に神道政策の大転換がおこる。この時期、平田家には主体的に対応しうる力量ある当主が存在していませんでした。結局、戸沢盛定という岐阜県出身の東京大学古典講習科で学んだ人、国学というよりも国文学がものすごく詳しい方、この方が第三代の娘さんと一八八七年に結婚して盛胤と改名して第四代になる。そうなると盛胤は教派神道の立場でしか宗教活動ができなくなりました。

松本　どうもありがとうございました。篤胤から銕胤、そして延胤というふうに継承された平田学は明治十年代に

も影響は続いていったわけですね。そういった意味では、時代的にちょうど神官教導職の分離ということで、とくに伊勢では神宮皇學館、東京では皇典講究所というところで神道・古典の教育が行われるようになる。神道といってもいわゆる宗教的なところではないところにいきますけれども、まさに入れ代わるときに皇典講究所、ここが國學院の母体となるところですが、近代的なシステムによって神社の神職が教育されていく。そういった大きな明治史のなかでそういう捉え方ができるのではないかと思います。

いろいろ議論があったんですが、阪本先生、なにかご意見ございますか。

阪本　いま宮地先生が大事なことを言われた。近代の神道史における平田学派の動向をもっと研究すべきとの趣旨があったと思いますが、これを契機としてそうした研究が進展することを大いに期待しています。

松本　阪本先生、ありがとうございました。話は尽きないようでありますけれども、そろそろ時間になりましたので終わりにしたいと思います。

最後に阪本先生のお言葉をいただきましたけれども、平田国学をはじめとする国学の影響というものは、これはある意味、昭和にまでいってしまうところもあるわけでありまして、それの限界は時代的にどこまでなのか、対象領域はどこまでなのか、そういうことの議論の一端をお示ししたかったということです。近代人文学の領域のみにとどまるものではない、非常に幅の広い学問が国学であったし、明治という時代に非常に生き生きと活躍していたんだということをすこしでもわかっていただければ成功だったと思います。なお、このシンポジウムの記録は紀要のほうに掲載させていただきたいと思いますので、また改めて紀要で確認していただければと思います。宮地先生・遠藤先生・三ツ松先生・阪本先生、ありがとうございました。これでシンポジウムをお開きとさせていただきます。ありがとうございました。

進行（菅）　先生方どうもありがとうございました。皆さま、先生方にいま一度拍手をお願い申し上げます。長時間にわたりましたが、これをもちまして明治聖徳記念学会公開シンポジウム「平田国学の幕末維新」を終了いたします。本日はまことにありがとうございました。